

志木市遺跡群

Ⅱ

1990

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太藏

志木市は、埼玉県の南東部に位置し、市域の地形は、大略、洪積台地と荒川の形成した沖積低地からなります。この台地は武蔵野台地の北東の先端部にあたり、その縁辺には埋蔵文化財の包蔵地が少なからず存在し、また、沖積低地にも徐々にではありますが発見されつつあります。

ところで、当市は都心から25kmという距離にあるため、住宅建設をはじめとする各種の開発行為が多く行われてきています。このことは必然的に埋蔵文化財包蔵地に大きな影響を与えることになり、これを保存してゆくことは文化財保護行政を行っていくうえで、重要な課題となってきました。

教育委員会では、かかる各種開発行為に伴う埋蔵文化財包蔵地の保存に関しては、主に発掘調査による記録保存の処置を取ることで対応しています。しかし、事業者が個人であって、その者が専用に用いる住宅の建設などは、発掘調査の費用負担などについて、困難な問題がありました。そのため、昭和62年度からは国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。

昭和63年度は、確認調査・発掘調査を併せ、14カ所の地点で行い、当市で初めての方形周溝墓の検出など、多大な成果をあげることができました。本書はその記録を掲載した報告書ですが、郷土の歴史を知るために活用して頂ければ望外の喜びです。

最後になりますが、調査及び本書の刊行にあたり、文化庁・埼玉県教育委員会ならびに地元の方々には多くのご指導・ご援助を賜りました。深く感謝する次第です。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する志木市遺跡群の昭和63年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会が主体者となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、昭和63年4月7日より平成元年3月31日まで実施した。
3. 本書の作成は志木市教育委員会が行い、編集は尾形則敏が担当した。また、執筆は下記のように分担した。

第1章、第2章第2節、第3章、第5章第2節 佐々木保俊

第2章第1・3・4・5節、第4章、第5章第1・3節、第6章 尾形則敏

4. 挿図版の作成は執筆者が行ったが、内野美津江・金野照子・深井恵子の協力を得た。
5. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。
 - 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
 - 遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
 - 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
 - 遺構の略記号は、以下のとおりである。

J＝縄文時代住居跡 Y＝弥生時代末葉～古墳時代初頭住居跡

H＝古墳時代・平安時代住居跡 D＝土坑

6. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

教 育 長 秋山太蔵

事務局次長 大西 弘

社会教育課長 白砂止明

社会教育係長 山中政市

社会教育課 下河辺信行・佐々木保俊・佐藤浩之（平成元年4月～）・尾形則敏・前川美香

発掘担当者 佐々木保俊・尾形則敏

7. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局指導部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・（財）埼玉県埋蔵

文化財調査事業団・志木市史編さん室・志木市立志木第三小学校・志木市立郷土資料館

会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・梅沢太久夫・片平雅俊・小出輝雄

肥沼正和・小滝 勉・笹森健一・斯波 治・坪田幹男・中島岐視生・並木 隆・根本 靖

松本富雄・柳井章宏・和田晋治

8. 発掘調査及び整理作業参加者

発掘協力員

内野美津江・鹿沼美智子・小副川真理子・金野照子・佐藤小夜子・田中鎮庫・高田輝子
深井恵子・宮本田ず子・村井京子・山科美智・渡辺 明

整理協力員

内野美津江・鹿沼美智子・小副川真理子・金野照子・深井恵子・宮本田ず子・村井京子

目 次

はじめに

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

第1章 昭和63年度調査成果の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査成果の概要	2
第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 縄文時代の遺構と遺物	7
第3節 弥生時代の遺構と遺物	19
第4節 平安時代の遺構と遺物	44
第5節 まとめ	46
第3章 田子山遺跡第1地点の調査	49
第1節 遺跡の概要	49
第2節 弥生時代の遺構と遺物	50
第4章 西原大塚遺跡第9地点の調査	52
第1節 遺跡の概要	52
第2節 弥生時代の遺構と遺物	52
第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査	55
第1節 遺跡の概要	55
第2節 縄文時代の遺構と遺物	55
第3節 弥生時代の遺構と遺物	62
第6章 中野遺跡第9地点の調査	64
第1節 遺跡の概要	64
第2節 弥生時代の遺構と遺物	65

図版目次

図版 1	西原大塚遺跡第 8 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版 2	◇	(上) 縄文時代11号住居跡 (下) 縄文時代11号住居跡・炉跡
図版 3	◇	(上) 15・16号土坑 (下) 20号土坑
図版 4	◇	(上) 31・32号土坑 (下) 33号土坑
図版 5	◇	(上) 35号土坑 (下) 36号土坑
図版 6	◇	(上) 弥生時代11号住居跡 (下) 弥生時代14号住居跡
図版 7	◇	(上) 弥生時代17・18号住居跡 (下) 18号住居跡遺物出土状態
図版 8	◇	(上) 弥生時代19号住居跡 (下) 弥生時代20号住居跡
図版 9	◇	(上) 弥生時代21号住居跡(掘り方) (下) 弥生時代22号住居跡
図版10	◇	1号方形周溝墓調査風景
図版11	◇	(上) 1号方形周溝墓(西より) (下) 1号方形周溝墓(北より)
図版12	◇	(上) 1号方形周溝墓土層堆積状態 (下) 1号方形周溝墓北溝
図版13	◇	(上) 1号方形周溝墓西溝 (下) 1号方形周溝墓北西隅
図版14	◇	(上) 39・40号土坑 (下) 41号土坑
図版15	◇	(上) 42号土坑 (下) 43号土坑
図版16	◇	(上) 1号方形周溝墓周辺 (下) 1号獨立柱建築遺構
図版17	◇	(上) 平安時代1号住居跡 (下) 平安時代2・3号住居跡
図版18	◇	縄文時代11号住居跡出土遺物
図版19	◇	弥生時代住居跡出土遺物 (14・15・18・21・22号住居跡)
図版20	◇	◇ (11・13・14・15・17号住居跡)
図版21	◇	◇ (18・19・21・22号住居跡)
図版22	◇	(上) 1号方形周溝墓出土遺物 (下) 41号土坑出土遺物
図版23	田子山遺跡第 1 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版24	◇	(上) 弥生時代1号住居跡 (下) 弥生時代1号住居跡出土遺物
図版25	西原大塚遺跡第 9 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版26	◇	(上) 弥生時代24号住居跡 (下) 弥生時代24号住居跡出土遺物
図版27	西原大塚遺跡第10地点	(上) 発掘風景 (下) 発掘調査区全景
図版28	◇	(上) 45・46号土坑 (下) 弥生時代25号住居跡
図版29	◇	(上) 土坑出土遺物 (下) 包含層出土遺物
図版30	◇	(上) 包含層出土遺物 (下) 弥生時代25号住居跡出土遺物
図版31	中野遺跡第 9 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版32	◇	(上) 弥生時代3号住居跡 (下) 弥生時代3号住居跡出土遺物

挿 図 目 次

第1図	市内の地形と調査地点 (1/20000) .. 3	第28図	1号方形周溝墓 (1/60) 39
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) .. 5	第29図	土坑 (1/60) 41
第3図	遺構分布図 (1/300) 6	第30図	1号方形周溝墓 出土遺物1 (1/3) 42
第4図	11号住居跡 (1/60) 及び炉跡 (1/30) 9	第31図	1号方形周溝墓 出土遺物2 (1/3) 43
第5図	11号住居跡出土遺物1 (1/4) 11	第32図	41号土坑出土遺物 (4/5) 44
第6図	11号住居跡出土遺物2 (1/3) 12	第33図	1号住居跡 (1/60) 45
第7図	11号住居跡出土遺物3 (1/3) 13	第34図	2・3号住居跡 (1/60) 46
第8図	土坑 (1/60) 17	第35図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) .. 49
第9図	土坑出土遺物 (1/3) 18	第36図	遺構分布図 (1/300) 50
第10図	11号住居跡 (1/60) 20	第37図	1号住居跡 (1/60) 50
第11図	13号住居跡 (1/60) 21	第38図	1号住居跡出土遺物 (1/3) 51
第12図	14号住居跡 (1/60) 22	第39図	遺構分布図 (1/300) 52
第13図	14号住居跡出土遺物 (1/4) 22	第40図	24号住居跡 (1/60) 53
第14図	15号住居跡 (1/60) 23	第41図	24号住居跡出土遺物1 (1/4) 54
第15図	15号住居跡出土遺物 (1/4) 24	第42図	24号住居跡出土遺物2 (1/3) 54
第16図	17号住居跡 (1/60) 24	第43図	遺構分布図 (1/300) 55
第17図	18号住居跡 (1/60) 25	第44図	土坑 (1/60) 56
第18図	18号住居跡出土遺物 (1/4) 27	第45図	土坑出土遺物 (1/3) 57
第19図	19号住居跡・30号土坑 (1/60) 28	第46図	包含層出土遺物1 (1/3) 60
第20図	21号住居跡 (1/60) 29	第47図	包含層出土遺物2 (1/3) 61
第21図	21号住居跡出土遺物 (1/4) 30	第48図	25号住居跡 (1/60) 63
第22図	22号住居跡 (1/60) 32	第49図	25号住居跡出土遺物 (1/3) 63
第23図	22号住居跡出土遺物 (1/4) 33	第50図	周辺の地形と調査地点 (1/5000) .. 64
第24図	住居跡出土遺物1 (1/3) 33	第51図	遺構分布図 (1/300) 65
第25図	住居跡出土遺物2 (1/3) 34	第52図	3号住居跡 (1/60) 65
第26図	1号掘立柱建築遺構 (1/60) 35	第53図	3号住居跡出土遺物1 (1/3) 66
第27図	1号掘立柱建築遺構 出土遺物 (1/3) 37	第54図	3号住居跡出土遺物2 (1/3) 66

第1章 昭和63年度調査成果の概要

第1節 調査に至る経過

志木市は埼玉県の南東部に位置し、その地形は、大略、北東部は荒川（旧入間川）が形成した荒川低地、北西部が柳瀬川が開析した低地となり、南部はそれらの低地に挟まれるように舌状に突出した台地となる。この台地は武蔵野台地の先端部にあたり、市域の遺跡の大部分は台地縁辺部に存在する。

志木市は、首都圏に25kmという近距離に位置し、交通の便も比較的良好いため、昭和40年前後から急激に人口増加が始まり、ベッドタウン化してきた。このことは、当然のこととして、各種開発行為の増大をまねいてきた。現在、その現象は以前ほどではないが、それでも住宅建設を中心とした開発行為は少なくなく、これが埋蔵文化財包蔵地におよぶことも多々あり、これを保護・保存してゆくことが、文化財行政の上で重要な課題となっているが、これに対しては主に記録保存という処置によって対応している。

さて、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模なものが多く、その中で開発当事者が個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施には、費用の負担など困難な点が多々あった。また、最近、人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建替えも

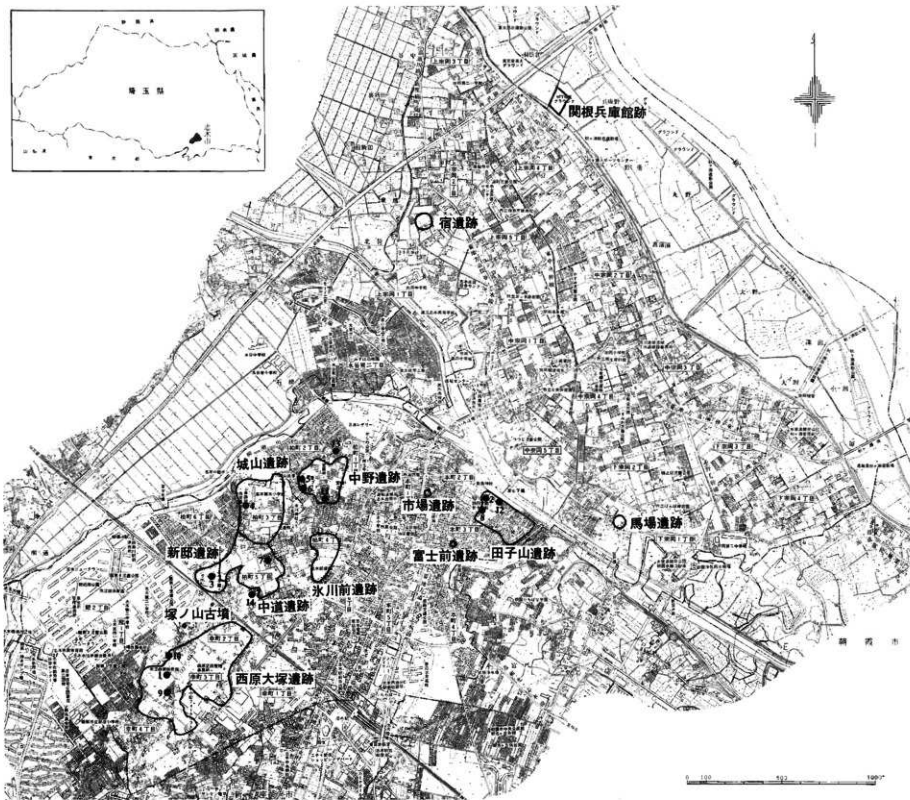
番 号	遺 跡 名	所 在 地	面 積 (㎡)
1	西原大塚遺跡第8地点	志木市幸町3丁目3122・3130	1227.00
2	田子山遺跡第1地点	本町2丁目1698-22	80.41
3	新邸遺跡第3地点	柏町5丁目3003-1	380.00
4	城山遺跡第5地点	柏町3丁目2627-3	125.00
5	中野遺跡第7地点	柏町2丁目1209-2	250.00
6	中野遺跡第8地点	柏町2丁目1209-1	388.05
7	中道遺跡第8地点	柏町5丁目2950-6	53.82
8	田子山遺跡第2地点	本町2丁目1727-5	62.41
9	西原大塚遺跡第9地点	幸町3丁目3133-6	75.86
10	西原大塚遺跡第10地点	幸町3丁目3124-4	80.51
11	中野遺跡第9地点	柏町1丁目1515-18	150.68
12	田子山遺跡第3地点	本町2丁目1691-13	84.70
13	中野遺跡第10地点	柏町1丁目1428-1	258.00
14	中道遺跡第9地点	柏町5丁目2925-2	243.45
合 計			3459.89

(第1図の番号と一致)

多くなってきており、これについても対処してゆく必要がでてきている。そのため、昭和62年度からは国・県よりの補助金の交付を受け、これに対応してゆくことにした。なお、昭和63年度は試掘調査も含めて以下に示した14地点の調査を実施した。

第2節 調査成果の概要

1. 西原大塚遺跡第8地点 後述。63委保記第2-3069。
2. 田子山遺跡第1地点 後述。63委保記第2-3845。
3. 新郷遺跡第3地点 試掘調査。
4. 城山遺跡第5地点 試掘調査。
5. 中野遺跡第7地点 試掘調査。
6. 中野遺跡第8地点 試掘調査。
7. 中道遺跡第8地点 試掘調査。
8. 田子山遺跡第2地点 試掘調査。
9. 西原大塚遺跡第9地点 後述。63委保記第2-5915。
10. 西原大塚遺跡第10地点 後述。63委保記第2-6315。
11. 中野遺跡第9地点 後述。63委保記第2-6820。
12. 田子山遺跡第3地点 試掘調査。
13. 中野遺跡第10地点 試掘調査。
14. 中道遺跡第9地点 試掘調査。



第1図 市内の地形と調査地点(1/20000)

第2章 西原大塚遺跡第8地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

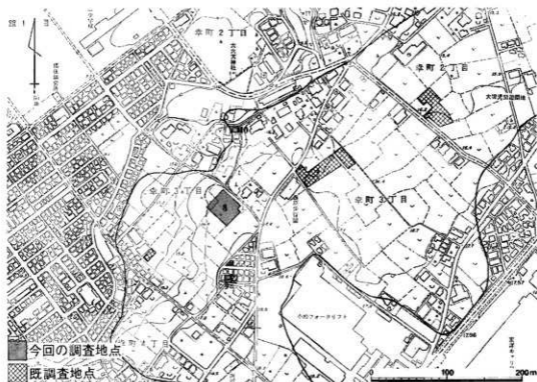
西原大塚遺跡は、志木市の南西端部に位置し、北西に柳瀬川を臨む台地上にある。標高は北端で約14m、南端で約18mを測り、南へ行くにつれてゆるやかに標高が高くなっている。これは志木市が東京都青梅市付近を扇頂に扇状地として形成された武蔵野台地の東端で、最も低い所に位置するためである。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和48年に実施され、以後の調査で縄文時代中期、弥生時代木葉～古墳時代初頭期の集落跡であることが知られている（谷井・宮野他 1975、志木市史編さん室 1984、佐々木・尾形 1985・1987・1989）。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和62年4月7日から開始した。なお、本地点の調査は前年度3月16日から継続して行われたもので、前年度報告できなかった分も含め、今年度に一括して掲載する。

本地点の場合、ある程度の遺構・遺物の検出が予想されていたので、トレンチによる試掘調査を



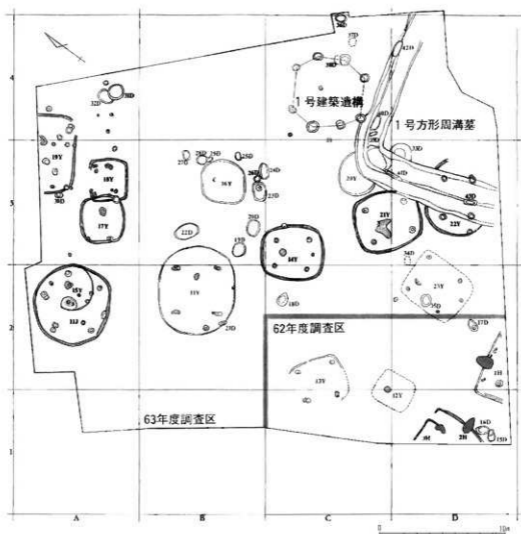
第2図 周辺の地形と調査地点(1/5000)

行わず、当初より調査区を全掘することにした。また、排土置き場及び植木（A列とB列の境に柿の木が植わっている）の関係から調査区を南半部・北半部・西半部（A列）と人体三分割し、最初に南半部から調査を始め、北半部に排土を置くことにした。

表土剥ぎは、バックホーの他にショベルカーを使用し、並行して遺構確認作業を行った。その結果、南半部からは弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての住居跡4軒（11～14Y）と縄文時代のものと思われる土坑数基が検出された。

4月25・26日には、西半部（A列）の表土剥ぎと同時に南半部の埋め戻しを行う。西半部からは縄文時代中期の住居跡1軒、土坑2基、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての住居跡4軒が検出された。

5月26・27・30日には、北半部に盛った排土を西半部（A列）と南半部に埋め戻し、同時に北半



第3図 遺構分布図(1/300)

部の表土剥ぎを行った。遺構の確認作業は6月6日から行われた。その結果、縄文時代のもと思われる上坑数基、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての住居跡4軒、そして市内では初めての検出例である方形周溝墓が1基確認された。

以上の調査から本地点では、縄文時代中期の住居跡1軒・上坑約20基、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての住居跡13軒・掘立柱建築遺構1棟・方形周溝墓1基、平安時代の住居跡3軒が検出され、すべての遺構の精査は8月4日に終了した。

8月6日には、重機による埋め戻しを完了、調査を終了した。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

11号住居跡 (第4図)

〔位置〕 (A-2) G。

〔住居構造〕 弥生時代15号住居跡に切られる。(平面形) 円形に近い五角形。(規模) 6.2 × 6.1 m。(壁高) 耕作による擾乱が著しく、遺存状態は不良である。北壁・東壁で10cm前後、南壁で30cm前後、西壁で20cm前後を測る。(壁溝) 幅10~15cm、深さ5~13cmを測り、ほぼ全周する。(床面) 全面よく踏み固められている。住居南半では、壁から60cm前後内側に入った部分が僅かではあるが段差をもつ。また、南壁下には半楕円形状の窪みがみられる。(炉跡) 住居中央から僅かに北に偏って位置し、125 × 100 cmの不整楕円形の掘り込みをもつ埋燗炉である。炉体土器は2個あり、前後関係が認められ、BがAを切る。Aは深さ25cmの掘り込みをもち、キャリパー形の深鉢形土器の上半部を埋設する。1層はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土、2層はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土。3層は焼土となる。Bは深さ35cmの掘り込みをもち、曽利式系統の深鉢形土器の上半部を埋設する。4層はローム粒子を多く、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。5層は焼土粒子を多く、ローム粒子を含む暗褐色土。3層は焼土となる。炉上面には、石皿・磨石の破片や礫が散布するが、石皿いというほどの規則性はない。(柱穴) 各コーナー部に位置する5本が支柱穴となろう。また、各柱穴の内側にもそれぞれ対応するように柱穴が検出されたが、これらは上面がロームにより貼られていた。なお、南壁下にも浅めのピットが1本みられるが、これは半楕円形の窪みと一体となって人口施設を形成するのかもしれない。(覆土) 上層は暗茶褐色土、下層は明茶褐色土を基調とし、自然堆積状態を呈する。

〔遺物〕 土器はが体土器以外は、大部分が破片で量的にも少なかった。なお、南壁際の覆土中から黒曜石破片が多量に出土した。

〔時期〕 加曾利EⅡ式期。

〔所見〕 2個検出されたが体土器に前後差があること、支柱穴の移動があることから、住居の拡張が考えられる。住居南半の床面の段差は、拡張前の住居の壁の痕跡と考えられようか。また、炉体土器として使用された土器が、それぞれ異系統の土器である点は注目される。

11号住居跡出土土物（第5～7図）

1は炉体土器Aとして埋設された土器。口縁部が内湾し頸部が外屈するキャリパー状を呈する。被熱のため器面の剥落が著しく不明な点があるが、口縁部文様帯は隆帯を半楕円形状に貼付して4単位に区画する。区画内には沈線による渦巻文、縦位の沈線を充填した楕円形文などが施される。胴部は条線を地文とし、2～3本の沈線を一組とした連弧文風の文様が器面を巡る。咲畑式系統といわれる土器であろうか。

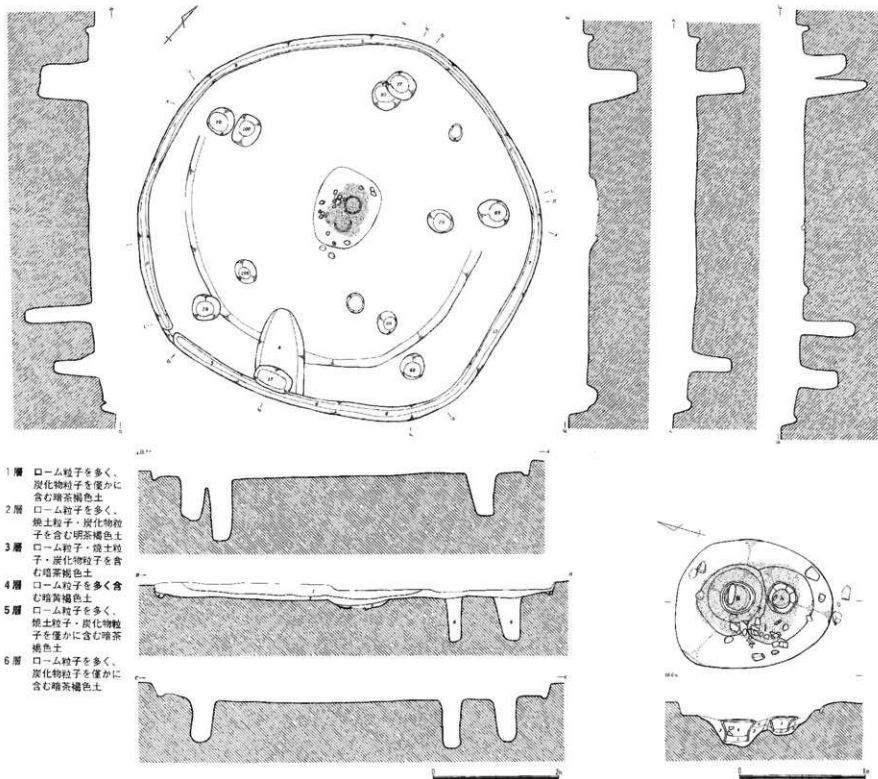
2は炉体土器Bとして埋設された土器。頸部が僅かに外反し、口縁部は内湾する。木土器も被熱による器面の剥落が著しい。頸部に蛇行する隆帯を巡らせ口縁部と胴部を区画する。口縁部の文様は縦位の集合する沈線を地文とし、蛇行する隆帯を19本垂下する。この隆帯間に5ヵ所やはり蛇行する短い隆帯を口縁から垂下する部分があるが、規則性はなさそうである。口唇端部は沈線で加飾される。胴部はL Rの単節斜縄文を地文とし、蛇行する隆帯を16本垂下し、その間には、1ヵ所が横位・縦位の隆帯が貼付され、1ヵ所が無加飾で、他は縦位の短い隆帯が貼付される。曾利式系統の土器である。

3は口縁部が単純に直線的に開くが、胴部は破損した部分で僅かに屈曲しそうである。口唇部下に狭い無文部をもち、以下Lの燃糸文が施される。

4～14は中期前半の土器。4は結節沈線文を平行に巡らし、その間に結節沈線文を斜位に充填する。口唇端部には押捺が加えられる。5は中央に窪みをもつ楕円形の突起が付けられる。突起の外周には押捺が連続して加えられ、内周は竹管状施工具による結節沈線文が施される。6は口縁から凹凸のある隆帯が垂下し、その横には2条の結節沈線文が弧状に施される。おそらく楕円形の区画文となろう。7は結節沈線文が連弧状に施される。8は突出した口縁から隆帯が垂下する。9は隆帯とそれに沿う結節沈線文がみられる。10は結節沈線文を波状に巡らす。11は隆帯による長楕円形の区画がなされ、それに沿ってキャタピラ文が施される。区画内には波状沈線文や連続刺突文が充填される。12は口唇部下に結節沈線文を巡らせ、以下は結節沈線文を斜位に集合して施される。胎土中には雲母を含む。13は刻みが加えられた隆帯が巡り、沈線による区画内には縦位の結節沈線文が充填される。14は刻みが加えられた隆帯が曲線的に貼付される。15は隆帯による長楕円形の区画内に縦位の集合する沈線が充填される。

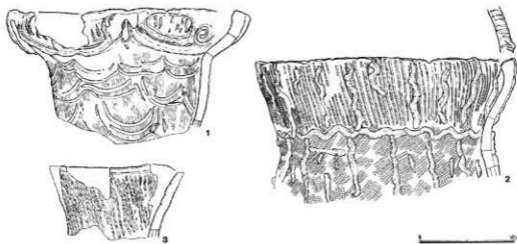
16～19・21～24は中期後半の土器。16は口唇部下に3条の沈線が巡り、以下Rの燃糸文が施される。17は口唇部下に凹線が巡り、以下R Lの単節斜縄文が施される。18はR L Rの複節斜縄文が施される。19は条線を地文とし、口唇部下に丸棒状施工具の押し引きによる連続刺突文が2条、沈線が1条巡る。21は条線を地文とし、沈線により曲線的な文様が描かれる。22は微隆起帯が巡り、おそらく「∩」字状になると思われる区画内には条線が施されている。23・24は連弧文系統の土器で、地文は条線。

20・25は曾利式系統の土器。20はおそらく弧状に沈線が施されるものと思われる。25は「く」字状に屈曲する頸部に3条の沈線と蛇行する隆帯が巡り、口縁部と胴部を区画する。口縁部には重弧文が施され、蛇行する隆帯が垂下する。内面は口唇部下に斜位の集合する沈線が施され、隆帯が巡る。胴部には集合する沈線が垂下されるらしい。



- 1層 □ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土
- 2層 □ローム粒子を多く、炭土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土
- 3層 □ローム粒子、炭土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土
- 4層 □ローム粒子を多く含む暗茶褐色土
- 5層 □ローム粒子を多く、炭土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土
- 6層 □ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土

第4図 11号住居跡(1/80)及び炉跡(1/30)



第5図 11号住居跡出土遺物1 (1/4)

26~28は打製石斧。

26は撥形に近い形状を呈する完形品である。礫面を残す横長の剥片を素材とし、表面では図左上の節理面の部分を除き周縁に比較的粗く加工を施す。裏面はほぼ全周に加工を加えるが、刃部に比べて側縁の加工が密である。刃部は円刃状を呈する。両側縁には敲打痕がみられる。粘板岩製で、重量は130g。

27は撥形を呈する。基部に一部欠損部分があるが、ほぼ完形である。横長の剥片を使用し、表裏面とも図左側縁に細かな加工を施すが、刃部には比較的粗い加工が加えられている。刃部は円刃状を呈する。横断面が長方形で、表面と側面に礫面を残していることから、角礫を素材にしたものと思われる。スレート製で、重量は92.7g。

28は刃部側は $1/2$ を欠損するが、短冊形を呈するものと思われる。おそらく縦長の剥片を素材としているのだろう。表面は基部側に礫面を残し、周縁に加工を施す。裏面は周縁に比較的密な、器面には粗い加工が施される。両側縁には敲打痕が顕著にみられる。粘板岩製で、重量は84g。

(2) 土坑

15号土坑 (第8図)

〔位置〕 (D 1) G。

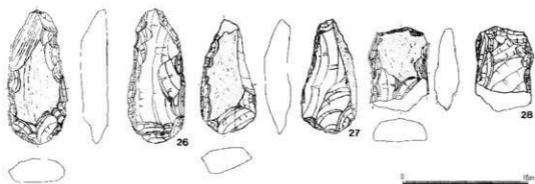
〔構造〕 16号土坑と重複するが、前後関係は確認できなかった。(平面形) 長方形。(規模) 103×58cm。(深さ) 10cm前後を測る。(長軸方位) N-53°-E。坑底は平坦であるが、東側が坑底から15cm前後ピット状に窪む。壁の立ち上がりは急斜である。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のものと考えられる。



第6图 11号住居跡出土遺物2 (1/3)



第7図 11号住居跡出土遺物3 (1/3)

16号土坑 (第8図)

〔位置〕 (D-1) G。

〔構造〕 15号土坑と重複するが、前後関係は確認できなかった。(平面形) 楕円形。(規模) 95×75cm。(深さ) 25cm。(長軸方位) N-28°-W。坑底は平坦で、壁は60度前後の角度で立ち上がる。(覆土) 暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のものと考えられる。

17号土坑 (第8図)

〔位置〕 (D-2) G。

〔構造〕 (平面形) 卵形状を呈する。(規模) 110×65cm。(深さ) 20cm前後を測る。(長軸方位) N-22°-E。坑底は平坦であるが、北側に坑底から40cmの深さを測るピットがうがたれている。壁は60度前後の角度で立ち上がる。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のものと考えられる。

18号土坑 (第8図)

〔位置〕 (C-2) G。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 110×80cm。(深さ) 15cm前後を測る。(長軸方位) E-W。坑底はほぼ平坦で、壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のものと考えられる。

19号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] (平面形) 隅丸方形。(規模) 115×105cm。(深さ) 25cm前後を測る。(長軸方位) N-48°-E。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

[遺物] 土器片が僅かに出土した。

[時期] 中期中葉か。

19号土坑出土遺物 (第9図1・2)

1は隆帯の両側にキャクピラ文が施された土器。2は波状沈線文が施された土器で、胎土中には雲母が含まれる。

20号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 143×106cm。(深さ) 35cm前後を測る。(長軸方位) N 70°-E。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) 上層はローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土、下層はローム粒子・炭化物粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土である。

[遺物] なし。

[時期] 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

21号土坑 (第8図)

[位置] (B-2) G。

[構造] 弥生時代11号住居跡に切られる。(平面形) 長楕円形。(規模) 70×25cm。(深さ) 10cm前後を測り、断面皿状を呈する。(長軸方位) N-50°-W。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を含む暗黄褐色土の単一土層である。

[遺物] なし。

[時期] 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

23号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] 26号土坑に切られる。(平面形) 長方形。(規模) 155×105cm。(深さ) 17cm前後を測る。(長軸方位) N-48°-E。坑底は平坦であるが、坑内東側に坑底から深さ15cmの掘り込みがある。壁は急斜に立ち上がる。(覆土) 2層-ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。3層-ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土。4層-ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。

[遺物] 土器片が僅かに出土した。

[時期] 中期後半か。

23号土坑出土遺物 (第9図3・4)

3は底部破片。沈線による懸垂文がみられる。4は陰帯が巡り、以下条線が施される。

24号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] (平面形) 長楕円形。(規模) 140×73cm。(深さ) 13cm前後を測る。(長軸方位) N-44°-E。坑底は平坦で、断面皿状を呈する。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

[遺物] なし。

[時期] 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

25号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] (平面形) 楕円形。(規模) 70×45cm。(深さ) 10cm前後を測る。(長軸方位) N-50°-E。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

[遺物] なし。

[時期] 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

26号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] 23号土坑を切る。(平面形) 不整形。(規模) 58×55cm。(深さ) 15cm前後を測り、断面碗状を呈する。(長軸方位) N-55°-W。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

[遺物] なし。

[時期] 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

27号土坑 (第8図)

[位置] (B-3) G。

[構造] (平面形) 長方形。(規模) 75×52cm。(深さ) 25cm前後を測る。(長軸方位) N-51°-E。坑底は中央部が僅かに深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

[遺物] 土器片が僅かに出土した。

[時期] 中期後半か。

27号土坑出土遺物 (第9図5)

5は刻みが加えられた隆帯が巡らされた土器。

28号土坑 (第8図)

〔位置〕 (B-3) G。

〔構造〕 29号土坑と重複するが、前後関係は確認できなかった。(平面形) 隅丸方形。(規模) 83×79cm。(深さ) 10cm前後を測る。(長軸方位) N-50°-E。坑底は平坦で、壁は50度前後の角度で立ち上がる。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

29号土坑 (第8図)

〔位置〕 (B-3) G。

〔構造〕 28号土坑と重複するが、前後関係は確認できなかった。(平面形) 楕円形。(規模) 60×40cm。(深さ) 18cm前後を測る。(長軸方位) N-68°-W。坑底は平坦で、壁は60度前後の角度で立ち上がる。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

30号土坑 (第8図)

〔位置〕 (A-3) G。

〔構造〕 弥生時代19号住居跡に切られる。(平面形) 長方形。(規模) 68×50cm。(深さ) 11cm前後を測り、断面皿状を呈する。(長軸方位) N-56°-W。(覆土) ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

31号土坑 (第8図)

〔位置〕 (A-4) G。

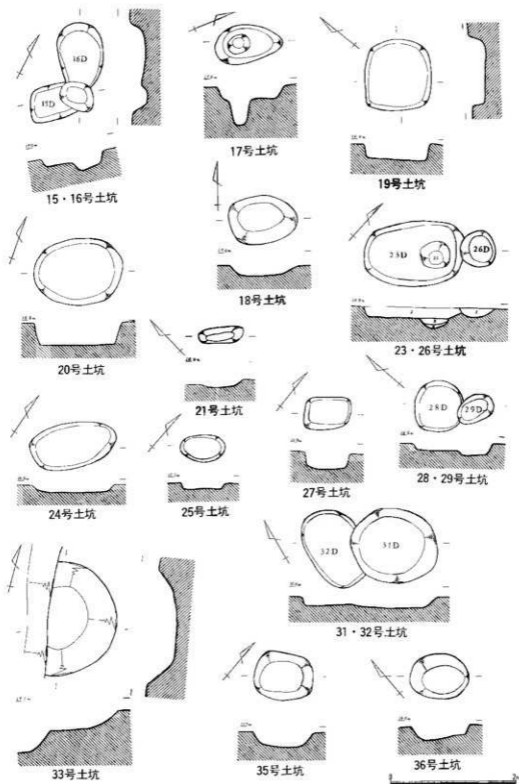
〔構造〕 32号土坑を切る。(平面形) 楕円形。(規模) 140×120cm。(深さ) 18cm前後を測る。(長軸方位) N-65°-W。坑底は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。(覆土) ローム粒子を多く、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 なし。

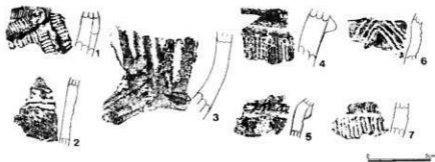
〔時期〕 不明。覆土の状態から縄文時代のもと考えられる。

32号土坑 (第8図)

〔位置〕 (A-4) G。



第8图 土坑 (1/60)



第9図 土坑出土遺物 (1/3)

〔構造〕 31号土坑に切られる。(平面形)長方形。(規模)130×90cm。(深さ)15cm前後を測る。(長軸方位)N-3°-W。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土)ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土の単一土層である。

〔遺物〕なし。

〔時期〕不明。覆土の状態から縄文時代のものと考えられる。

33号土坑 (第8図)

〔位置〕(D-3)G。

〔構造〕1号方形周溝墓に切られる。(平面形)円形になろうか。(規模)不明×182cm。(深さ)38cm前後を測る。(長軸方位)不明。坑底は平坦で、壁は40度前後の角度で立ち上がる。(覆土)上層は焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土である。

〔遺物〕土器片が僅かに出土した。

〔時期〕中期中葉か。

33号土坑出土遺物 (第9図6・7)

6は4条の結節沈線文が波状に施されると思われる土器。7は横位の沈線を境として、連続爪形文と縦位の集合する沈線が施される。

35号土坑 (第8図)

〔位置〕(D-2)G。

〔構造〕弥生時代23号住居跡に切られる。(平面形)長方形。(規模)92×75cm。(深さ)22cm前後を測る。(長軸方位)N-56°-E。坑底は中央部が僅かに深く、壁は急斜に立ち上がる。(覆土)炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕なし。

〔時期〕不明。覆土の状態から縄文時代のものと考えられる。

36号土坑（第8図）

〔位置〕（C-4）G。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）95×70cm。（深さ）23cm前後を測る。（長軸方位）N-52°-W。坑底は比較的凹凸があり、壁は急斜に立ち上がる。（覆土）上層はローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を多く含む明茶褐色土である。

〔遺物〕なし。

〔時期〕不明。覆土の状態から縄文時代のものと思われる。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

（1）住居跡

11号住居跡（第10図）

〔位置〕（B-2）G。

〔住居構造〕21号土坑を切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）7.0×6.0m。（長軸方位）N-55°-E。（壁高）20cm前後を測る。（壁溝）なし。（床面）大部分が耕作による攪乱を受けているが、遺存する部分では非常に硬く踏み固められている。（炉）住居中央よりやや北東に偏って位置する。54×42cmの楕円形の地床炉で、焼土は厚さ6cm程堆積している。（柱穴）主柱穴4本で構成される。各柱穴は2・3本重複しており、連結えがあったものと考えられる。（貯蔵穴）住居南コーナーに位置する。50×42cmの不整形を呈し、深さ34cmを測る。覆土はローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。（覆土）上層はローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕縄文時代の土器片が多く、当該期の土器は覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頃。

11号住居跡出土遺物（第24図1・2）

1は壺形土器の口縁部破片である。内面は横ナデ後、横方向にヘラ磨き、外面は横方向にハケ目調整が施される。

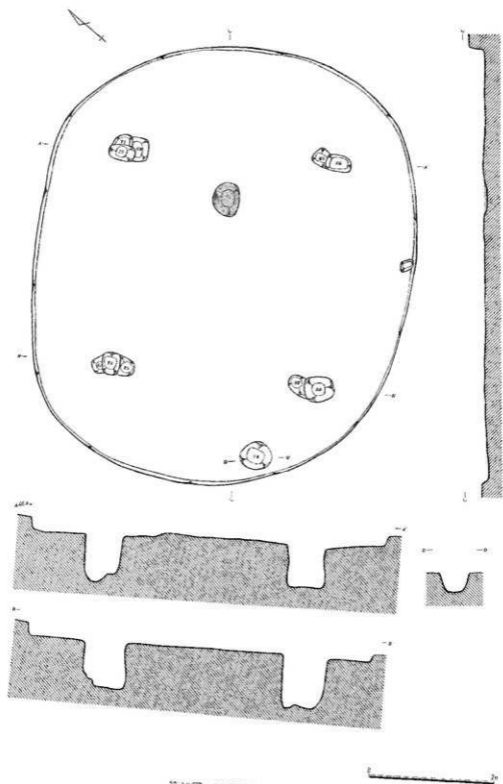
2は台付壺形土器の脚台部破片である。内面はヘラナデ、外面は縦方向にハケ目調整が施される。

13号住居跡（第11図）

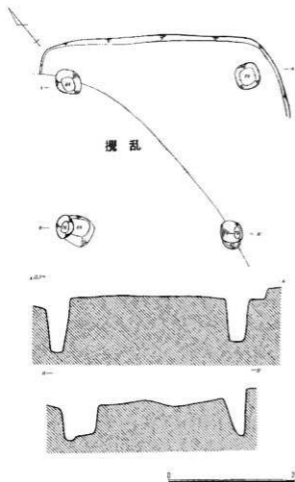
〔位置〕（C-2）G。

〔住居構造〕特に住居西半は攪乱が著しい。（平面形）隅丸方形と思われる。（規模）不明×3.8m。（壁高）比較的に遺存状態の良い北壁で、18cm前後を測る。（壁溝）なし。（床面）すでに遺構確認の段階で、一部床の硬化部分が露出していた。硬化部分は住居中央付近にみられる。（柱穴）主柱穴4本で構成されるが、南側の2本については重複形態をもつ。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から僅かに土器小破片が出土した。



第10图 11号住居跡 (1/60)



第11図 13号住居跡 (1/60)

トは入口施設に伴うものと考えられる。また、東壁に接するピットは後世のものである。(貯蔵穴) なし。(覆土) 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土。特に床面上からは炭化材が多く検出された。

[遺物] 床面上・覆土中から僅かに土器片が出た。

[時期] 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

[所見] 床面上から炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と考えられる。

14号住居跡出土遺物 (第13図・第24図7～15)

甕形土器 (第24図7・8)

7は複合口縁を呈する口縁部破片で、複合部外面にはRLの単節斜縄文が施され、下端には刻みが付される。8は底部破片で、外面立ち上がり部にはハケ目痕がみられる。

甕形土器 (第13図・第24図9～15)

第13図は台付甕の破片である。底部は脚台部との接合を強化するために、やや尖らせて作っている。内面はヘラナデ後、細かい暗文風のヘラ磨きが施される。外面は胴部中位が横方向、以下縦方

[時期] 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

13号住居跡出土遺物 (第24図3～6)

すべて甕形土器の小破片である。3

は口縁部付近。内外面ハケ目調整後、磨かれているが、器面の剥落がひどい。4は胴上半部。外面ハケ目調整、内面ヘラナデが施される。5・6は脚台部との境付近の胴下半部。同一個体で、外面に縦位のハケ目調整が施される。

14号住居跡 (第12図)

[位置] (C-3) G。

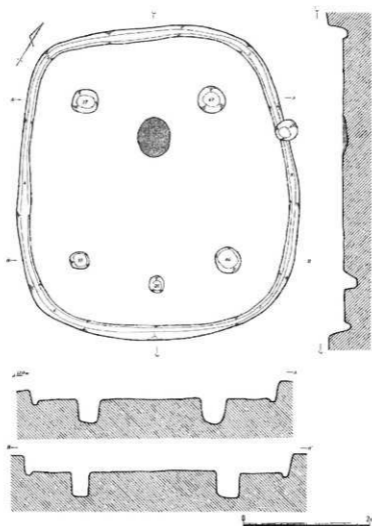
[住居構造] (平面形) 隅丸長方形。

(規模) 5.0×4.4 m。(長軸方位)

N-33°-W。(壁高) 30cm前後を測る。

(壁溝) 上幅12cm・下幅5cm前後、深さ4～8cmを測り、全周する。(床面) 炉の周辺はよく踏み固められている。

(炉) 住居中央よりやや北西に偏って位置する。64×52cmの楕円形の地床炉で、焼土は8cm程堆積している。(柱穴) 土柱穴4本で構成される。深さは37～42cmを測る。南壁寄りにあるピット



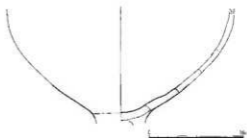
第12図 14号住居跡 (1/60)

向に磨きが施されるが、ハケ目痕が僅かに残る。また、内面には煤の付着がみられる。床面上の出土で、胴下半部を1/3程遺存する。

9～13は口縁部付近、14は胴下半部、15は脚台部破片である。

9・11は同一個体で、複合口縁状を呈する口縁部外面には長さ1 cm程の刻みが付される。11の頸部内面には顕著に輪積み痕がみられる。

内面はナデ、外面は目の粗いハケ目調整が施される。10は口縁部外面にやや右上りの刻みが付され、内外面に目の細かいハケ目調整が施される。12は9・11に類似するが、口縁部が外反せず、直立する点でやや異なる。13は口唇部が平坦に面取られており、内面には粗密の異なったハケ目がみられ



第13図 14号住居跡出土遺物 (1/3)

る。外面は口縁部横ナデ、頸部はナデであろうか。

14は内面に煤の付着がみられ、外面にはハケ目痕が残る。

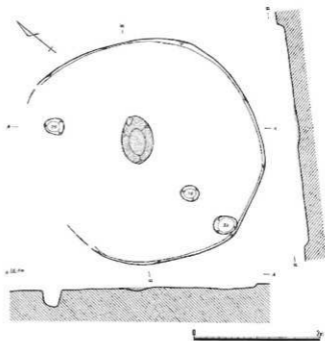
15は器面の磨耗が目立つが、外面にハケ目痕がみられる。

15号住居跡 (第14図)

〔位置〕 (A-2) G。

〔住居構造〕 縄文時代11号住居跡の覆土中に構築されている。(平面形) 隅丸方形か。(規模) 不明×3.58m。(壁高) 西壁は確認することはできなかったが、その他では10cm前後を測る。(壁溝) なし。

(床面) 炉の周辺のみ硬く踏み固められている。(炉) はぼ住居中央に位置する。76×50cmの楕円形を呈し、焼土は厚さ4cm程堆積する。また、焼土上には15×8cmの礎が1個置かれていた。(柱穴) 住居内に3本のピットが検出された。南壁のピットは貯蔵穴であるかもしれない。(貯蔵穴) 南壁の



第14図 15号住居跡 (1/60)

ピットが相当すると思われる。38×30cmの楕円形を呈し、深さ29cmを測る。覆土は炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) 焼土粒子・炭化物粒子を多く、ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 床面上・貯蔵穴内から僅かに土器小破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

15号住居跡出土遺物 (第15図・第24図16～23)

壺形土器 (第24図16～20)

16～19は同一個体で、頸部付近の破片である。ヘラ描線下にRLの単節斜縄文と附加条縄文が施され、附加条は軸繩の燃りと反対の方向に結んであるものである。施文順序は上→下の順であるが、沈線を最後にまわしている。内面はヘラナデ、外面は磨き後、赤彩される。20は胴部中位の破片で、内面はヘラナデ、外面は僅かにヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕が残る。また、外面には赤色塗料の付着がみられる。

鉢形土器 (第24図21)

口縁部が内湾する小型のものである。文様はLRの単節斜縄文が口唇部及び外面口縁部に施され、さらに外面口縁部には円形赤彩文が付される。内外面ともていねいに磨かれており、無文部は赤彩

される。

変形土器 (第15図・第24図22・23)

第15図は台付甕の脚台部である。器形は概して「ハ」字状を呈し、裾端部は粘土が内側にややめくれている。内外面ハケ目調整が施される。覆土中の出土で、脚台部は完形である。



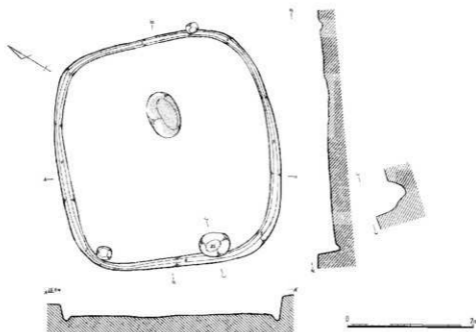
第15図 15号住居跡
出土遺物 (1/4)

第24図22は口縁部破片で、口幹部外面には棒状工具による押捺が付される。内面はナデ、外面は目の細かいハケ目調整が施される。23は脚台部破片で、裾端部は第15図の上器同様に、粘土が内側にややめくれている。内面はナデ、外面は縦方向にハケ目調整が施される。

17号住居跡 (第16図)

〔位置〕 (A-3) G。

〔住居構造〕 18号住居跡を切る。(平面形) 隅丸方形。(規模) 3.70×3.53m。(長軸方位) N-50°-E。(壁高) 30cm前後を測る。(壁溝) 上幅15cm・下幅6cm前後、深さ3-7cmを測り、全周する。(床面) 炉の周辺が硬く踏み固められている。18号住居跡との重複部分は粘土が施されている。(炉) 住居中央よりやや北東に偏って位置する。76×50cmの楕円形の地床炉で、焼土は厚さ4cm程堆積している。(柱穴) 検出された2本の小ピットは後世のものである。(貯蔵穴) 南西壁に接する南コーナー付近に位置する。48×38cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。覆土はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(覆土) ローム粒子を多く、焼土粒



第16図 17号住居跡 (1/60)

子・炭化物粒子を含む暗黄褐色土。特に、東壁寄りの床面上からは焼土粒子が多く検出された。

〔遺物〕覆土中から僅かに土器小破片が出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕東壁寄りの床面上から多くの焼土粒子が検出されたことから、焼失住居と考えられる。

17号住居跡出土遺物 (第24図24～29)

壺形土器 (24)

口縁部は複合口縁を呈し、器形は内面に文様帯をもつことから、口縁部が大きく開くものと思われる。文様は口唇部にLRの単節斜縄文、内面には単節羽状縄文が施される。外面は複合部が横ナデ、頸部にはハケ目痕がみられる。

甕形土器 (25～28)

25は口縁部破片で、口唇部には1条の沈線がまわる。内外面ハケ目調整が施される。26は胴上半部で、内面はナデであろうか、外面はハケ目調整が施される。27は頸部破片で、内面ハケ目調整、外面はナデが施される。28は胴部中位。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。

高環形土器 (29)

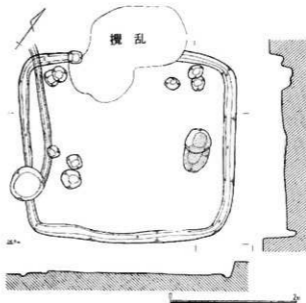
脚台部の小破片で、裾端部は平坦である。内外面ハケ目調整が施されるが、外面はその後、僅かに磨かれている。

18号住居跡 (第17図)

〔位置〕(A-3)G。

〔住居構造〕17号住居跡に切られる。(平面形)長方形。(規模)3.36×3.04m。

(長軸方位)N-36°-W。(壁高)比較的に遺存の良い部分で、38cmを測る。(壁溝)確認できる範囲では全周する。上幅20cm・下幅7cm前後、深さ2～8cmを測る。(床面)がの周辺が硬く踏み固められている。(炉)住居中央より北東に偏って位置する。70×40cmの楕円形の地床炉で、焼土は厚さ4cm程堆積している。(柱穴)住居内には10本のピットが検出されているが、後世のものと考えられる。(覆土)上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。



第17図 18号住居跡 (1/60)

〔遺物〕床面から10cm程上の覆土中から土器がまとまって出土した。

〔時期〕弥生時代末葉から古墳時代初頭。

〔所見〕17号住居跡との新旧関係は、擾乱のため土層観察では不明であったが、本住居跡の床面上に17号住居跡の貼床が施されていることから18号住居跡→17号住居跡の新旧関係が判明した。また土器は床面上から10cm程浮いた状態で出土していることから、一括廃棄されたものと考えられる。

18号住居跡出土遺物 (第18図・第25図30~42)

増形土器 (第18図1)

底部は小さく、やや窪んでおり、胴部は球形を呈する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。内外面ともにていねいなヘラ磨きが施されるが、口縁部外面にはハケ目痕が僅かに残る。磨きの方向は内面が口縁部縦方向、胴部横方向、底部付近縦方向、外面が口縁部縦方向、胴部斜方向、底部付近縦方向で、遺存度は1/2程である。

壺形土器 (第25図30~33)

30・31は複合口縁を呈する口縁部破片で、複合部外面にはLRの単節斜縄文が施される。また、30には口唇上にRLの単節斜縄文が施される。いずれも内面は横方向にヘラ磨きが施され、その後赤彩されている。

32は胴上半部破片で、LRの単節斜縄文と「S」字状結節文がみられる。内面ナデ、外面はヘラ磨き後、赤彩される。

33は底部破片で、内面はヘラナデ、外面は磨かれるが、ハケ目痕が残る。

高環形土器 (第18図3・4、第25図42)

第18図3は環部の底部と体部との境は丸味をもち、口縁部は内湾ぎみに大きく開く。脚台部は円錐形状を呈し、途中3孔が開けられている。脚台部内面を除き、全面ヘラ磨きがていねいに施されるが、環部の口縁部付近には僅かにハケ目痕が残る。ハケ目の方向は環部が内面及び口縁部外面縦方向、底部外面斜方向。脚台部は外面縦方向であるが、環底部直下はその後、横方向に施される。脚台部内面はヘラナデであるが、裾部付近は横ナデが施される。環部を1/2程欠損する。

4は3の脚台部とほぼ同形であるが、内面天井部は器形に沿って尖らせるようにヘラ状工具による成形がなされる。内面は以下ハケ目調整、外面は縦方向にヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕を残す。環底部内面はヘラ磨きが施され、赤色塗料の付着がみられる。また、3孔を有し、孔は外側から内側に向って開けられている。脚台部1/2程遺存する。

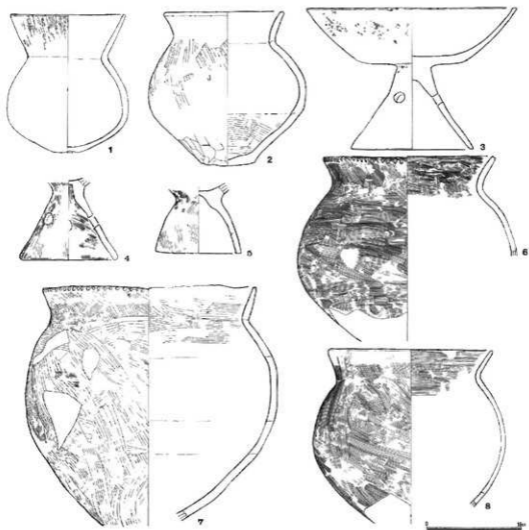
第25図42は脚台部の孔付近の小破片で、外面はヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕が残る。内面はヘラナデか。

甕形土器 (第18図2・5~8、第25図34~41)

第18図2は小型甕である。最大径を胴部中位に測り、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。器面は剝落により荒れているが、口縁部内外面横ナデ、内面は以下ヘラナデ、底部付近は目の粗いハケ目調整が施される。外面は胴上半部に目の粗いハケ目痕、底部付近にヘラ削り痕が残る。ほぼ完形。

5は台付甕の脚台部で、器形は「ハ」字状を呈し、裾端部は平坦である。甕の底部内面はヘラナデ、脚台部外面はハケ目調整が施される。脚台部内面はナデであろうか。脚台部を2/3程遺存する。

6は最大径を胴部中位に測り、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。口唇部はハケ状工具により一度平坦面(外面のみが面取られているのでやや沈線状を呈する)をつくり、その後刻み加えられ



第18図 18号住居跡出土遺物 (1/4)

る。調整は全体にハケ目調整が施されるが、ハケ目痕は目の粗いものと細かいものと2種が観察でき、概して粗いハケの後に細かいハケが使用されている。胴部内面はヘラナデが施される。ハケ目の方向は口縁部内面が横方向、外面は口縁部が縦方向、胴上半～中位が横方向、胴下半が縦方向である。口縁部から胴下半部にかけて3/5程遺存する。第25図37は同一個体である。

7は最大径を胴上半部に測り、頸部が「く」字状を呈し、口縁部は外傾する。口唇部外面は刻みが加えられる。内面は口縁部が横方向のハケ目調整、以下ヘラナデ、外面は全面ハケ目調整が施されるが、口縁部はその後横ナデされる。ハケ目は内外面目の粗いものである。口縁部から胴下半部にかけて3/5程遺存する。

8は最大径を胴部中位に測り、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。内面は口縁部がハケ目調整、以下ヘラナデ、外面は全面ハケ目調整が施されるが、口縁部はその後軽く横ナデされる。ハケ目の方向は口縁部内面が横方向、外面は口縁部が縦方向、以下斜方向である。口縁部から胴下半部にか

けて2/3程遺存する。

第25図34～38は口縁部付近、39～41は胴部破片である。

34・35は口縁部に1段輪積み痕を残し、口唇部外面に刻みが加えられる。35の方が僅かに輪積み痕の幅が広い。いずれも内外面横ナデされる。35と38は同一個体である。36・37は口縁部が外反し、口唇部外面に刻みが加えられる。37は内外面ハケ目調整が施される。

39はやや厚めの土器で、内面はナデ、外面はハケ目調整が施される。40は内面がヘラナデ、外面が目の粗いハケ目調整が施される。41は内面がナデ、外面がハケ目調整が施される。

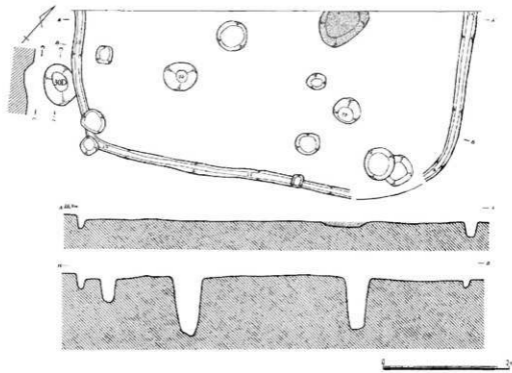
19号住居跡 (第19図)

[位置] (A-3) G。

[住居構造] 住居西半は調査区外にあり、30号土坑を切る。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×6.24m。(壁高) ローム上面が床面であるため、壁の掘り込みは確認できなかった。(壁溝) 確認できる範囲ではほぼ全周する。上幅18cm・下幅6cm前後、深さ9～15cmを測る。(床面) 特に東壁寄りには攪乱が著しく床面は残っていないが、炉の周辺及び住居中央付近はよく踏み固められている。(炉) 住居中央より北東に偏って位置するものと考えられる。西側1/3程は調査区外にある。

(柱穴) コーナー付近の深さ93cm・79cmの2本は主柱穴である。他のピットは後世のものと思われる。(覆土) ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土中から僅かに土器小片を出土した。



第19図 19号住居跡・30号土坑 (1/60)

[時期] 弥生時代末葉～古墳時代初頭。

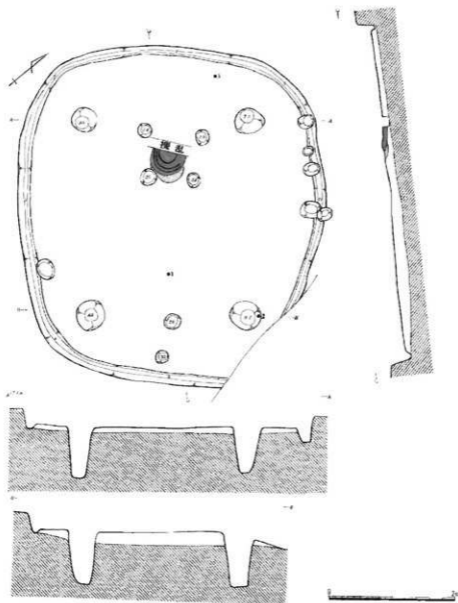
[所見] 表土の厚さが15cm程度と薄いうえ、耕作されているために遺存状態は極めて悪い。

19号住居跡出土遺物 (第25図43～45)

壺形土器の小破片である。43は内面ナデ、外面靡きが施される。44・45は内面ヘラナデ、外面ハケ目調整が施される。

21号住居跡 (第20図)

[位置] (C-3) G。



第20図 21号住居跡 (1/60)

〔住居構造〕 1号方形周溝墓に切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 5.40×4.88m。(長軸方位) N-50°-W。(壁高) 25cm前後を測る。(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅15cm・下幅8cm前後、深さ4~11cmを測る。(床面) 厚さ8~22cmを測る貼床が施されており、壁際を除いてよく踏み固められている。(炉) 住居中央よりやや北西に偏って位置するが、攪乱が著しい。粘土火皿を使用しているが、その直下から焼土の堆積(厚さ6cm程)がみられることから、火皿使用前は地床炉が使われていた可能性がある。また、炉を囲むように4本のピットが検出されたが、炉の付属施設として関連がありそうである。(柱穴) 貼床の精査時に主柱穴4本と北東・南西壁に接する後世のピットが確認できた。また、掘り方の精査時には、新たに炉周辺の4本と南東壁寄りの2本が確認できたが、本来は貼床精査時に確認できなくてはならないはずが、攪乱により確認できなかったものと思われる。南東壁のピットについては、入口施設に伴うものと考えられる。(貯蔵穴) なし。(覆土) 上層はローム粒子を多く、炭化物粒子・焼土粒子を含む明茶褐色土、下層は炭化材・焼土粒子を多く、ローム粒子を含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕 床面上から実測可能な土器が3点出土している。

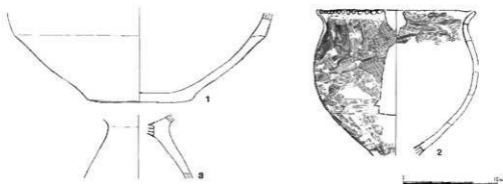
〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。

〔所見〕 床面上から炭化材・焼土粒子が多く検出されたことから、焼失住居と考えられる。

21号住居跡出土遺物 (第21図・第25図46~50)

壺形土器 (第21図1、第25図46)

第21図1は胴下半部に明瞭な稜を有する。内面はヘラナデ、外面は胴部中位が縦方向に、稜線直下が横方向、以下縦方向にヘラ磨きが施される。住居中央よりやや南東に偏った床面上の出土で、胴下半部以下1/3程遺存する。



第21図 21号住居跡出土遺物 (1/4)

第25図46は複合口縁を呈する口縁部破片である。内外面ナデであろうか。

甕形土器（第21図2・3、第25図47～50）

第21図2は台付甕で、脚台部を欠損する。胴上半部に最大径をもち、口唇部外面にはハケ状工具により刻みが加えられる。内面は口縁部付近横方向にハケ目調整、以下ヘラナデが施される。外面は口縁部が横ナデ、以下胴上半部は縦方向、中位は横方向、下半部は縦方向にハケ目調整が施される。東コーナーの柱穴付近の床面レベルでの出土で、口縁部から胴下半部付近を1/3程遺存する。

第25図47は同一個体である。3は脚台部破片で、器面は磨耗しているが、内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラ磨きが施されている。北西壁寄りの床面上の出土で、脚台部2/3程遺存する。

第25図48・49は口縁部破片で、48は口唇部外面に刻みが加えられる。内外面ハケ目調整であろうか。49は口縁部が「く」字状を呈し、口唇部には刻みが加えられる。内面口縁部ハケ目調整、以下ヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。50は脚台部破片。裾端部は内側にやや粘土がめくれているが、内外面ハケ目調整が施される。

22号住居跡（第22図）

〔位置〕（D-3）G。

〔住居構造〕1号方形周溝墓により、住居中央を短軸方向に切られる。また、東半は特に擾乱が著しい。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明。（長軸方位）N-57°-E。（壁高）比較的に遺存状態の良い西壁で34cmを測る。（壁溝）住居跡が遺存する部分では確認できる。上幅18cm・下幅6cm前後、深さ3～8cmを測る。（床面）遺存する部分では、壁際を除いて良く踏み固められている。貼床が施されており、厚さは20cm程を測る。（柱穴）主柱穴4本で構成される。東西の2本については、重複形態をもつ。（貯蔵穴）南西コーナーに位置する。48×40cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。（覆土）上層はローム粒子・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層は焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を多く、ローム粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から僅かに土器小片が出土した。

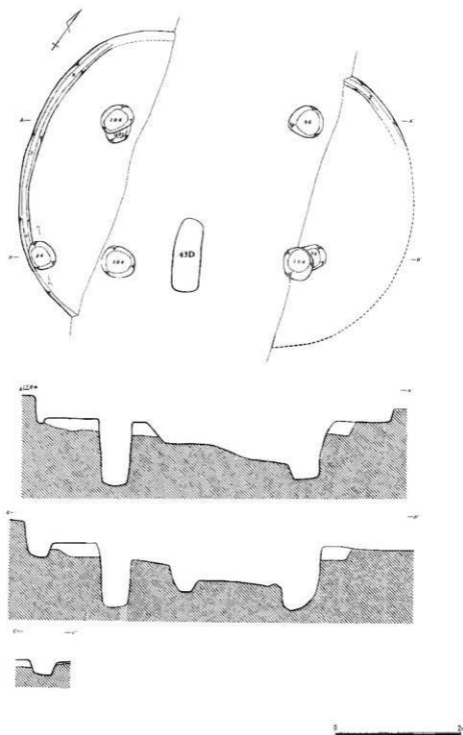
〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

〔所見〕覆土下層から焼土粒子・炭化物粒子・炭化材が多く検出されたことから、焼失住居と考えられる。

22号住居跡出土遺物（第23図・第25図51～55）

甕形土器（第25図51・52）

51・52は口縁部破片で、51は複合口縁を呈し、その下端にはハケ状工具による刻みが加えられる。文様は外面複合部に単節斜縄文と「S」字状結節文がみられる。内面は口縁部ヘラナデ、頸部はハケ目調整、外面頸部はハケ目調整が施される。52の口縁部は外面にやや粘土がめくれているが、輪積みによるものであろうか。内外面僅かに磨かれているが、ハケ目痕が残る。ハケ目は内面が目の細かいのに対し、外面はやや目が粗い。



第22圖 22号住居跡 (1/60)

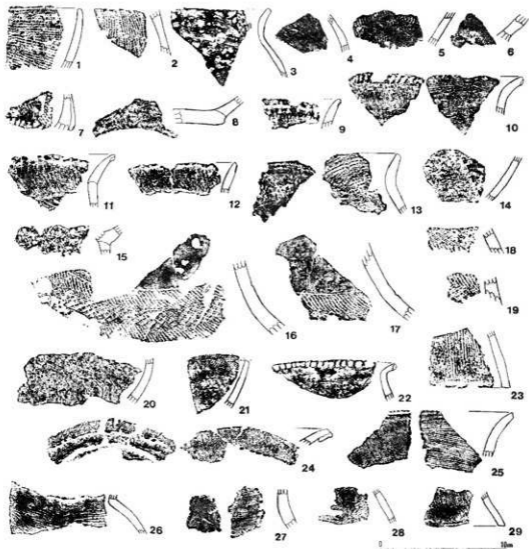
甕形土器 (第23図、第25図53~55)

第23図は台付甕の脚台部である。器形は「ハ」字状を呈しており、裾端部は平坦である。内面天井部には粘土を補い、接合を強化した痕が残る。また、甕底部内面には炭の付着がみられる。内面はナデ、外面は磨耗が激しいが、僅かにハケ目痕が残る。第25図55は同一個体である。

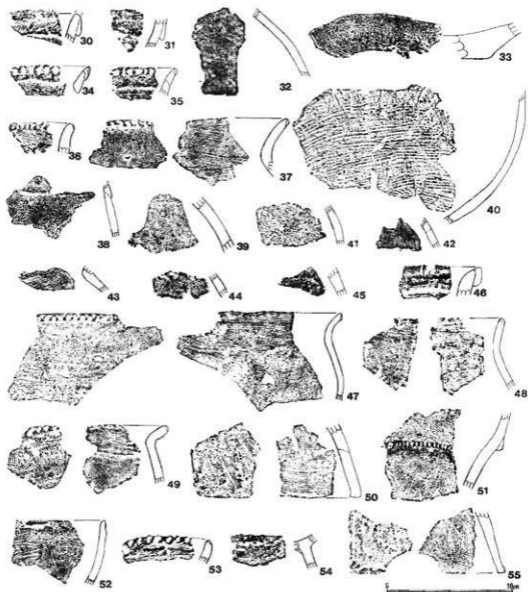
第25図53は口縁部破片で、口唇部外面には刻み加えられる。内面ナデ、外面ハケ目調整。54は台付甕の脚台部破片で、内面天井部には第23図の土器同様に粘土を補い、接合を強化した痕がみられる。外面にはハケ目痕が僅かに残る。



第23図 22号住居跡
出土遺物 (1/4)



第24図 住居跡出土遺物1 (1/3)



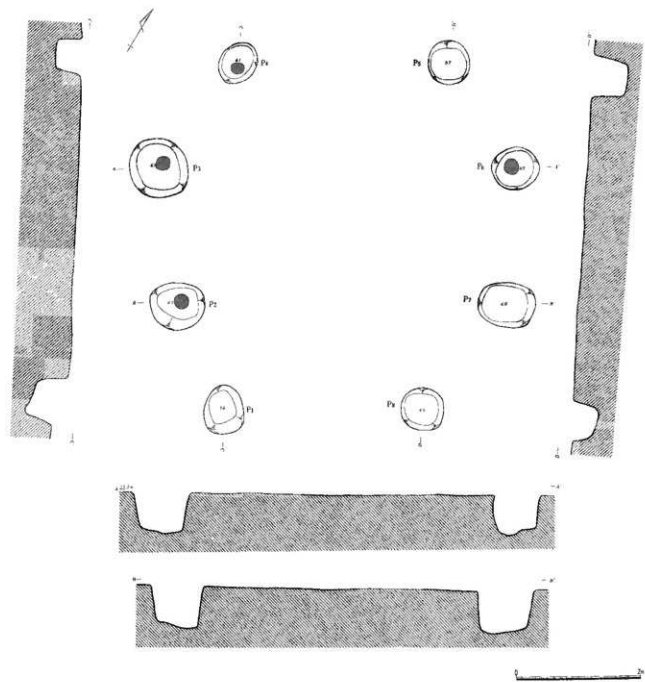
第25図 住居跡出土遺物 2 (1/3)

(2) 掘立柱建築遺構

1号掘立柱建築遺構 (第26図)

〔位置〕 (C-4) G。

〔構造〕 P1～P8の8本で構成され、P1は1号方形周溝墓を切る。本遺構は掘立柱建築遺構といっても通例の方形の配置をとらない点で異例である。柱穴はいずれも規模が大きく、土坑状を呈しており、P1 (76×64cm、深さ56cm)、P2 (88×76cm、深さ67cm)、P3 (94×92cm、深さ63cm)、P4 (72



第26图 1号独立柱建基遺構 (1/60)

×58cm、深さ41cm)、P5 (72×64cm、深さ57cm)、P6 (77×68cm、深さ63cm)、P7 (92×70cm、深さ66cm)、P8 (68×67cm、深さ40cm) を測る。

柱穴間の距離は、P1-P2 (180cm)、P2-P3 (220cm)、P3-P4 (190cm)、P4-P5 (330cm)、P5-P6 (190cm)、P6-P7 (220cm)、P7-P8 (200cm)、P8-P1 (320cm) を測る。

柱穴の覆土は、全体的に粒子が密で粘性が強い概して土質のしまったもので、P7・P8がやや黒味の強い黒色土である他は、ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。なお、図示したスクリーン部分には、特に硬く光沢をもっている部分であり、柱座にあたるものと考えられる。

本遺構の確認面であるローム面は耕作により攪乱が著しい。

〔遺物〕柱穴の覆土中からの土器の出土は、大部分が縄文時代の土器片で混入したものである。弥生時代末葉～古墳時代初頭の土器片は3点出土したが、遺物から時期を比定するのは難しい。

〔時期〕一応、弥生時代末葉～古墳時代初頭としたい。

〔所見〕本遺構は当初、1つ1つの単独の土坑として存在するものと思われたが、類似するものが周囲から検出され、規則的な配列をなすことから、1つの遺構として理解することとした。

まず構造については、柱穴の規模・深さからP2・P3の2本とP6・P7の2本、そしてP4・P5の2本とP8・P9の2本がそれぞれ対応するというのである。前者は後者に比べ、規模が大きく、掘り込みも深くなっていることがわかる。さらに、柱穴間の距離はその計測値から、次の3グループに分けられる。

1. 190cm程度 (P1-P2、P3-P4、P5-P6、P7-P8)
2. 220cm程度 (P2-P3、P6-P7)
3. 320cm程度 (P4-P5、P8-P1)

特に、P4-P5とP8-P1が他の柱穴間より1m以上も長いということは、構造上、特筆すべきことであろう。よって、本遺構は方向性として、P2・P3-P6・P7を示す軸(方位はN-60°-E)とP4・P5-P8・P1を示す軸(方位はN-32°-W)の2方向が考えられ、さらに推測すると、P2・P3-P6・P7の4本により支柱穴が構成され、これらを補助するものとして他の4本が配された可能性がありそうである。

次に時期については、柱穴の配列だけを見ると、縄文時代の所産のものと考えられそうであるが、P1が1号方形周溝墓を切っている点や柱穴の覆土から観察して、一応、弥生時代末葉～古墳時代初頭の所産のものと考えたい。

1号掘立柱建築遺構出土遺物 (第27図)

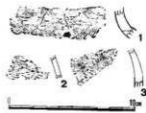
壺形土器 (1)

頸部破片で、LRの単節斜縄文上に円形浮文が1個残っている。

内面はヘラナデ、外面は縦方向のヘラ磨き後、赤彩される。

甕形土器 (2・3)

いずれも胴部付近の破片で、内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。



第27図 1号掘立柱
建築遺構出土遺物 (1/3)

(3) 方形周溝墓

1号方形周溝墓 (第28図)

〔位置〕 (C-3・4~D-3・4) G。

〔周溝の構造〕 21・22号住居跡、33号土坑を切り、20号住居跡、1号掘立柱建築遺構に切られる。今回の調査では、北西隅及び北・西溝の一部の範囲を確認したにすぎないが、特筆すべき事項として、周溝が2重構造(以下、内側の溝を内溝、外側の溝を外溝とする)を呈し、周溝内に5基の土坑を有する。

(西溝) B-B'土層図から内溝(覆土7~12層)、外溝(覆土2~6層)の覆土堆積状態を観察でき、新旧関係は内溝→外溝と判明した。外溝は開口幅250cm、溝底幅180cm、深さ54cm、内溝は溝底幅110~130cm、深さ83~95cmを測る。長さは確認できる範囲で12.6mを測り、外溝の長さに該当するものと考えられる。断面は外溝より内溝の方が壁の立ち上がりが急斜で、外溝は扁平な逆台形を呈する。溝底は内・外溝ともに軟弱で確認が困難である。

(北溝) 東側は擾乱が著しい。確認できる範囲では長さ13.8m、開口部幅180~218cmを測る。深さは内溝が51~77cm、外溝が21~44cmを測る。内溝の溝底幅は90~120cm。溝底は内・外溝ともに軟弱で確認が困難であり、西溝と接する北西隅部分は周囲より一段楕円形状に低くなっている。

(覆土) 全体として、内側のマウンド下部があったであろう側からの流入がみられる。内溝の覆土は7~12層でやや粒子が粗い暗茶褐色土、外溝は2~6層で粒子が細かく黒味の強い土層を基調とする。

(遺物の出土状態) 溝内からは縄文時代中期の土器片が多く、該期の土器は概して内溝覆土中から若干出土(内溝底上15cm程)したのみであった。また、20~22号住居跡の重複により、溝内出土の土器の中には混入したものも当然含まれていると考えた方がよいであろう。

土坑 (第29図)

39号土坑 〔位置〕 (C-4) G。

〔構造〕 内溝の溝底面から確認された。(平面形) 楕円形。(規模) 80×35cm。(深さ) 10cm。(長軸方位) N-55°-W。(覆土) ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む黒色土。

〔遺物〕 出土しなかった。

40号土坑 〔位置〕 (C-4) G。

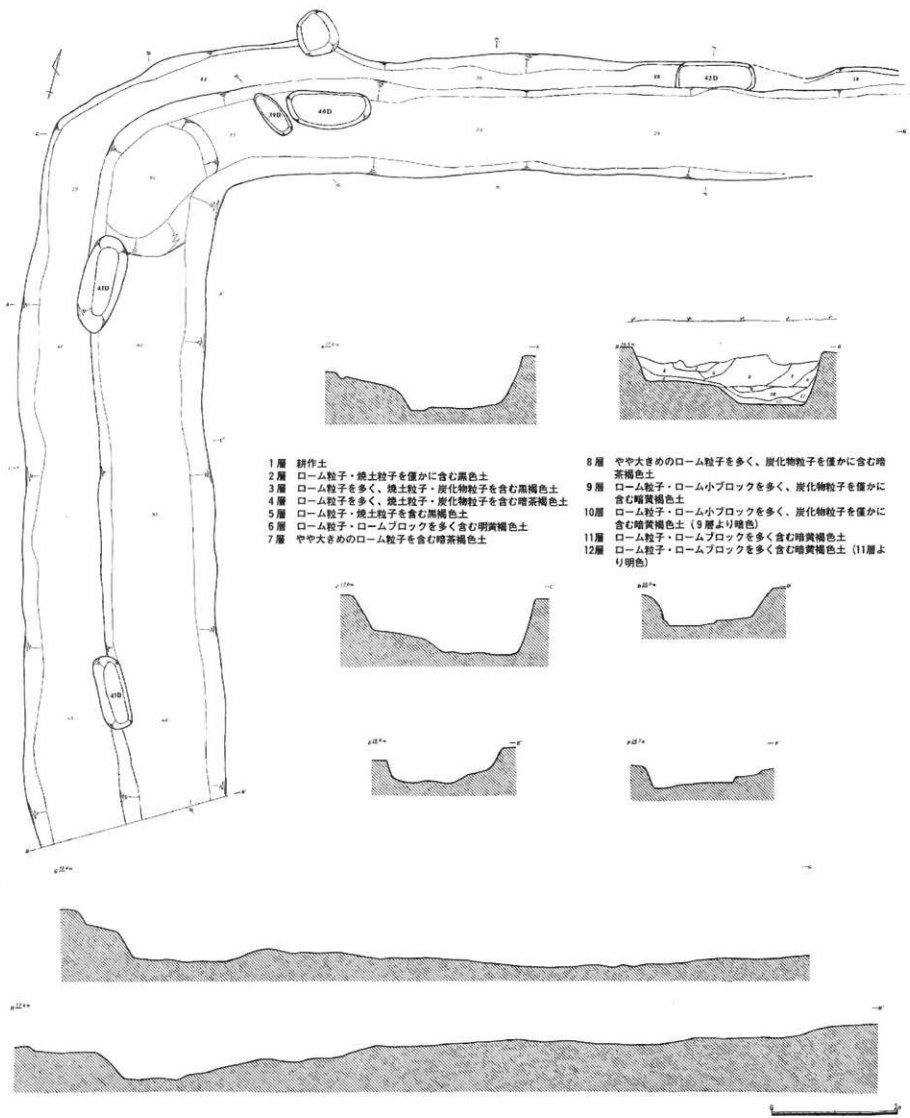
〔構造〕 内溝の溝底面から確認された。(平面形) 楕円形。(規模) 135×60cm。(深さ) 15cm。(長軸方位) N-84°-E。(覆土) ローム粒子・炭化物粒子を多く、ローム小ブロックを僅かに含む暗黄褐色土。

〔遺物〕 出土しなかった。

41号土坑 〔位置〕 (D-3) G。

〔構造〕 外溝の溝底面から確認された。(平面形) 楕円形。(規模) 155×64cm。(深さ) 38cm。(長軸方位) N-6°-W。(覆土) 粒子が非常に細かい暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 北寄りから管玉3点出土した。



第28図 1号方形周溝墓 (1/60)

42号土坑 [位置] (D-4) G。

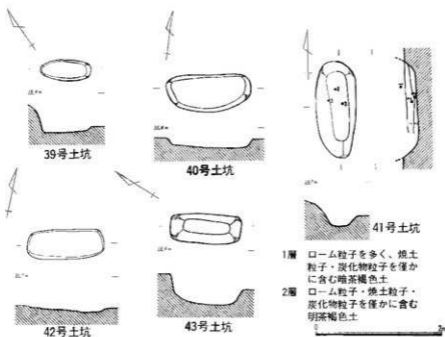
[構造] 外溝の溝底面から確認された。(平面形) 長方形。(規模) 123×48cm。(深さ) 僅か5cm程である。(長軸方位) N-74°-E。(覆土) ローム粒子を多く含む黒色土。

[遺物] 出土しなかった。

43号土坑 [位置] (D-3) G。

[構造] 外溝の溝底面から確認された。(平面形) 長方形。(規模) 113×27cm。(深さ) 50cm。(長軸方位) N-30°-W。(覆土) ローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含む、粒子が非常に細かい明茶褐色土。41号土坑の覆土に類似する。

[遺物] 出土しなかった。



第29図 土坑 (1/60)

1号方形周溝墓出土遺物 (第30・31図)

壺形土器 (1・2・7~21)

1の内面はナデ、外面は縦方向にヘラ磨きが施されるが、内外面にはハケ目痕が残る。頸部付近を2/3程遺存する。

2は平底の底部外縁の粘土がやや上方にめくれている。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕が残る。底部付近を1/3程遺存する。

7~14は口縁部、15~20は頸部から胴上半部にかけての破片である。

7は口縁部に至り受11状を呈する。粘土紐を挟み込む技法により作出される複合口縁には4本の棒状浮文と2条の「S」字状結節文をもつ単節羽状襷文がみられ、その下端は刻みが加えられる。

内面は横方向のヘラ磨き、外面は文様施文部以外にヘラ磨きが施され、内外面ともにその後、赤彩される。8は剥落が著しい。複合部には2本の棒状浮文が付され、その下端は刻み加えられる。内面はヘラ磨き、外面は複合部直下にハケ目痕がみられる。9の複合部は横方向のハケ目調整後、上段にL Rの単節斜縄文、下段に附加条縄文(?)が施され、その下端はハケ状工具による刻み加えられる。内面及び複合部直下はヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕が僅かに残る。10は複合口縁を呈し、口唇上及び外面にL Rの単節斜縄文が施される。内面は横方向のヘラ磨き後、赤彩される。11の複合部には網目状燃糸文が施される。内面は横方向のヘラ磨き後、赤彩される。12の複合部下端にはハケ状工具による刻み加えられる。内外面ヘラ磨きであろうか。13は内面に「S」字状結節文をもつL Rの単節斜縄文、口唇上にL Rの単節斜縄文が施される。内外面ハケ目痕が顕著にみられる。14の内面には2条の「S」字状結節文をもつR Lの単節斜縄文が施される。内外面ヘラ磨きが施されるが、僅かにハケ目痕が残る。

15にはR Lの単節斜縄文が施され、内面はナデられるが、ハケ目痕が僅かに残る。外面はハケ目調整。16は附加条縄文(?)上に円形浮文が2個(1個は剥落)付される。内面はナデ、外面にはハケ目痕が僅かに残る。17は小型壺で、胴上半部にL Rの単節斜縄文が2段、下方に2条の「S」字状結節文が施される。外面は横方向のヘラ磨きがていどに施され、その後赤彩される。内面にはハケ目痕が僅かに残る。18は単節羽状縄文下に3条の「S」字状結節文が施される。内面はナデ、外面はヘラ磨き。また、外面には赤色塗料の付着がみられるが、小破片のため円形赤彩文であるかは不明である。19は2条の「S」字状結節文をもつL Rの単節斜縄文が施される。内面には僅かにハケ目痕が残り、外面はヘラ磨き後、赤彩される。20の外面はヘラ磨き後、1条のヘラ描沈線文が施される。内面はヘラナデか。

鉢形土器 (21)

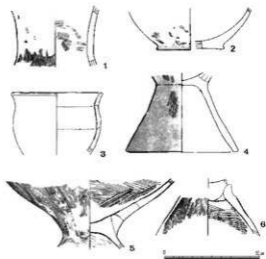
口縁部付近の破片で、口唇上及び口縁部外面にL Rの単節斜縄文が施される。内外面ヘラ磨き後赤彩される。

高坏形土器 (4)

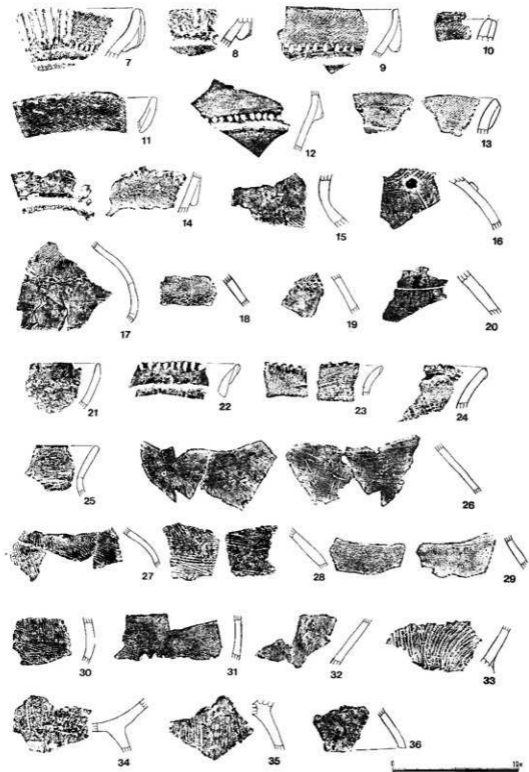
脚台部である。器形は「ハ」字状を呈し、裾端部は平坦である。内面はヘラナデ、外面は縦方向にヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕が僅かに残る。外面は赤彩される。胴台部を4/5程度残存する。

甕形土器 (3・5・6・22~36)

3は小型甕で、胴上半部にややふくらみを有し、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。最大径は口縁部に測り、頸部内面には明瞭な稜線がみられる。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外



第30図 1号方形周溝墓出土遺物1 (1/4)



第31图 1号方形周溝墓出土遺物2 (1/3)

面は棒状工具のようなもので縦方向に磨きが施される。口縁部から胴下半部を1/3程遺存する。

5は台付甕で、内外面ハケ目調整が施される。胴下半部はその後斜方向のヘラ磨きを加えられる。胴下半部から脚台部にかけて1/3程遺存する。

6は台付甕の脚台部で、器形は「ハ」字状を呈する。脚台部との接合はソケット式である。内外面ハケ目調整が施され、脚台部を1/3程遺存する。

22～25は口縁部、26～32は胴部、33～36は胴部下半から脚台部の破片である。

22は1段の輪積み痕を残し、口唇部外面はハケ状工具により刻みを加えられる。内外面横ナデされる。23は内外面ハケ目調整が施され、口唇部外面の刻みもハケ状工具によるものである。24は口唇上に刺突状の刻みを加えられ、内面は横ナデ、外面にはハケ目痕が残る。25の内面は横ナデ後、ヘラ磨き、外面は横ナデが施される。26の内面は目の粗いハケ目調整、外面はヘラ磨きが施されるが、目の細かいハケ目痕が残る。27～32は外面ハケ目調整、内面は27がヘラナデ、28～31がハケ目調整、32はヘラ磨きが施される。29・30は同一個体である。

33～35は外面ハケ目調整、33・34の胴下半部内面はヘラナデ、34・35の脚台部内面はヘラナデが施される。36の端部は平里であるが、粘土が内側にややめくれている。内外面横ナデされる。

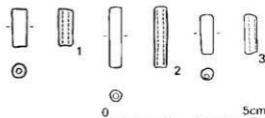
41号土坑出土遺物 (第32図)

碧玉製管玉である。色調は暗緑色を呈し、表面はていねいに磨かれており、光沢をもつ。

1は長さ13mm、直径5mm、穿孔径1.5mm、坑底上24cmからの出土、重量は650mg。

2は長さ20mm、直径4mm、穿孔径1.5mm、坑底面からの出土、重量は700mg。

3は長さ13mm、直径4mm、穿孔径1.5mm、坑底上6cmからの出土。重量は350mg。



第32図 41号土坑出土遺物 (4/5)

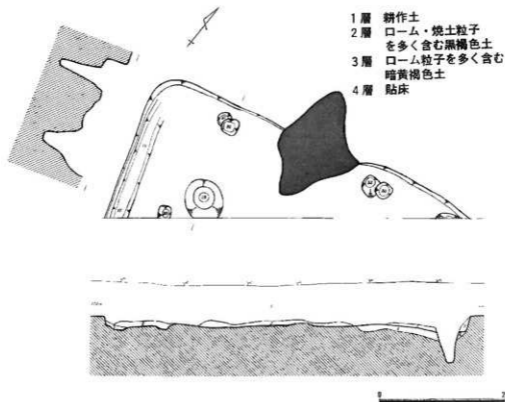
第4節 平安時代の遺構と遺物

1号住居跡 (第33図)

〔位置〕 (D-2) G。

〔住居構造〕 南側の大部分が調査区外にあり、さらに擾乱を受けているため詳細不明である。(壁高) 30cm前後を測る。(壁溝) 西壁で確認できたが、壁から5cm程内側に掘り込まれている。上幅25cm・下幅15cm、深さ15cm前後を測る。(床面) 硬化部分がみられるが、大部分は擾乱されている。北東コーナー付近は貼床が施されている。(カマド) 北壁のほぼ中央に位置する。天井部・袖部は灰褐色粘土で構築されているが、大部分は擾乱されている。(柱穴) 北西コーナーにある深さ59cmのものが支柱穴の1本と考えられる。他のピットは後世のものである。(覆土) ローム粒子・焼土粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 カマド・覆土中から土器片が僅かに出土したが、実測できるものはなかった。



第33図 1号住居跡 (1/60)

〔時期〕 国分式期。

〔所見〕 遺物の出土量が極めて少なかったため、調査当初は住居形態や規模から古墳時代後期（鬼高式期）の所産のものと考えた。しかし、その後カマド部分から若干まとまって長菱（国分式）の破片が出土したので、本時期に比定した。

2号住居跡（第34図）

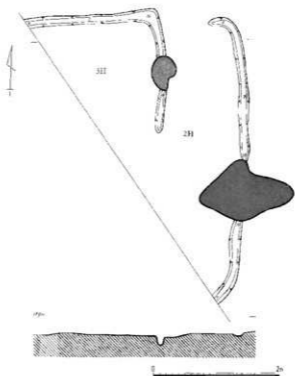
〔位置〕 (D-1) G。

〔住居構造〕 3号住居跡を切る。壁の掘り込みは浅く、さらに大部分が攪乱を受けているため詳細不明である。（壁溝）東壁にのみ確認できた。上幅18cm・下幅10cm前後・深さ7～10cmを測る。（床面）カマド前面及び住居中央付近に硬化部分が見られる。（カマド）東壁中央よりやや南へ偏って位置する。方位はN-87°-E。確認できる範囲では天井部・袖部は灰褐色粘土で構築される。（柱穴）確認できなかった。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基測とする。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土したが、実測できるものはなかった。

〔時期〕 国分式期

〔所見〕 3号住居跡のカマド上に貼床を施していることから、新旧関係は3号住居跡→2号住居跡と考えられる。



第34図 2・3号住居跡 (1/60)

3号住居跡 (第34図)

〔位置〕 (D-1) G。

〔住居構造〕 2号住居跡に切られる。南側の大部分は調査区外にあり、さらに攪乱を受けているため詳細不明である。(壁溝) 北・東壁の一部に確認できた。上幅15cm・下幅8cm前後・深さ4~10cmを測る。(床面) カマド前面に硬化部分が見られる。(カマド) 焼土・粘土塊が残存するのみである。

〔遺物〕 カマド・覆土中から土器片が僅かに出土したが、実測できるものはなかった。

〔時期〕 国分式期。

〔所見〕 カマド上に2号住居跡の貼床が施されていたことから、新旧関係は3号住居跡→2号住居跡と考えられる。

第5節 ま と め

1号方形周溝墓について

今回の調査により、市内では初めて方形周溝墓の存在が明らかになった。しかし、調査区の関係上、その全容は不明で、周溝の北・西溝のみの検出で終わってしまったが、今後の調査での解明に期待するところが大きい。

本遺構で特に、注目すべきことは、

①周溝が2重の重複形態をもつ。

②溝内土坑をもつ。

の2点である。

①については、当初、西溝だけではなく、北溝においても周溝（内溝）外側に1段浅いテラスが存在することから、同一周溝における構造上の特徴として捉えていた。しかし、B-B'間の土層の堆積状態から、2～6層と7～12層とは同一遺構の覆土ではないことが判明した。つまり、2～6層を覆土にもつ内溝と7～12層を覆土にもつ外溝が2重に重なり合い、本遺構のプランを形成しているのである。新旧関係は、前者が後者を切っていることから、内溝→外溝と理解することができる。

外溝が内溝を切って構築される時期は、単純に土層堆積状態から、内溝の覆土9層の存在によって、内溝が完全に埋没してから構築されたものと観察されるが、方形周溝墓の構造を考えた場合周溝内側のマウンド部を考慮する必要がある。周溝の土層は、周溝内側上層から外側下層方向に堆積しており、これは周溝内側マウンド部の土層の埋没による流れ込みの方向を示しているものと考えられる。このことから、基本的に内溝の覆土9層上層にもマウンド部の土層が堆積しており、外溝が構築される時期にもまだ、マウンド部は小高く、周溝は窪みとして残っていたのではないだろうか。

また、周溝の重複形態については、墓群の形成過程における溝の重複及び共用を考える必要がある。これは、伊勢湾周辺の墓制を分析した伊藤楨樹氏が、方形周溝墓を「方形周溝墓群」として捉え、単に方形周溝墓を個々の遺構だけで終らせず、群構成として考える必要があることを主張したものである。しかし、本遺構の場合、まだ群構成として考える段階ではないが、内溝と外溝が北・西溝でほぼ同一方向に重なる点、群構成の中で計画的に造られていく過程で、溝が重複しと理解するより、方形周溝墓単体のレベルでの埋葬行為に深く関係しているものと理解したい。

②については、可能性として5基の土坑（39～43号土坑）をあげることができる。ここで、内溝・外溝・土坑の関係を整理してみると、

1. 内溝と外溝の新旧関係は、内溝→外溝。
2. 41・43号土坑は、外溝のみた場合、坑底面からの検出であるが、内溝のみた場合は覆土中からの検出である。土坑と内溝はある程度の時間差がある。
3. 周溝内の土坑の位置は、内溝のみた場合、外壁に接し、溝底中央からはずれている。外溝のみた場合は42号土坑を除いて、ほぼ坑底中央に位置するようである。
4. 41・43号土坑上層に外溝の覆土が確認されたため、土坑は外溝埋没後に掘り込まれたものではない。ただし、外溝が完全に埋没する前に土坑が掘り込まれたのであれば、土坑上層に外溝の覆土の存在がありうる。

であり、1・2から3名の新旧関係は、内溝→外溝、内溝→土坑となり、3を考慮すると、可能性として土坑は、外溝と密接な関係がありそうである。さらに、土坑が外溝と関連するものであれば、4からおおまかに内溝→外溝→土坑の新旧関係が成立する。

以上、①では、外溝が構築された時期にはまだ内溝が完全に埋没していないことから、両者は偶

発的な関係になく、さらに②から、可能性として土坑と外溝とが関連し、新旧関係が内溝→外溝→土坑であると理解できる。

予察として、これら一連の遺構は、初源的には内溝をもつ方形周溝墓の死者のために築かれたものであったが、その後、追葬行為的に外溝が掘られ、溝内埋葬が行われたのではないだろうか。今後、東側部分の調査が可能であれば、以上の点を再認識し、調査の指針として考えたい。

〔註〕

- (1) 周溝内側のマウンド部については、表土剥ぎの段階で、あるいは耕作により削平されているものと考えられる。余談であるが、本遺構の中央付近は現在、墓地になっており、地主さんの話によると、以前はその部分が今よりこんもりと小高くなっていたという。偶然であるかもしれないが、方形周溝墓の上に現在でもなお、墓として機能を続けていることは興味ある事実である。
- (2) 神奈川県横浜市高速2号線建設に伴う「No.6遺跡」の3号方形周溝墓からは、南東・南西・北東の周溝に掘り返しの痕がみられており、松本充氏は「溝中埋葬の壺棺の類と並んで、方形周溝墓が単に一回限りの死者の埋葬行為のために築かれたものではないことの証左であろう」としている。
- (3) 周溝内の土坑については、一般に早期確認が困難であるためか、その多くは溝底で確認され覆土中から検出されることは少ない。神奈川県港区歳勝土遺跡の中で、溝内土壌についての考察がある。この中で、「周溝と掘り込みの関係について、溝内の土層の堆積状態から明らかにすることはできなかったが、土器の出土状態と掘り込みとの関係から、周溝内に土器が埋没した後に土壌が掘り込まれた」とし、同時に周溝から検出された2基の壺棺を含め、「周溝が埋葬の場の一つに使われていたことは明らかである。周溝のこのような機能からみて、周溝内に掘り込まれた土壌についても、それが埋葬施設の一つであった可能性はかなり高い」としている。また、「壺棺墓は乳幼児の墓制とみられるが、土壌墓は成人のもの」と示唆している。埼玉県立博物館により調査された埼玉県児玉郡前組羽根倉遺跡では、9基の土壌が検出され、碧玉製勾玉、滑石製管玉、鉄線等が出土している。この報告中、「溝内埋葬は二次的、あるいは副次的な埋葬としての意味を持つ施設であるため、そこにわずかなりとも、中央主体部出土の遺物と年代差が認められることはありうる」と論じている。
- (4) 埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口遺跡の報告中、群集する中型の方形周溝墓には溝中埋葬が多く、大型の方形周溝墓には溝中に埋葬される可能性が少ない傾向があり、前者の被葬者には「その構成員」をあて、後者については「より首長的」な性格であるとしている。
- (5) 出土遺物として、41号土坑から3点の管玉が出土したことに注目される。3点の管玉は1点（第29図41号土坑の1）を除いて、坑底より浮いた状態で検出されたが、いずれも土坑の北寄りに集中する。埋葬施設として付属するものはないが、この3点の管玉の出土位置は被葬者を埋葬する際の頭の方角を示しているものと考えられる。

第3章 田子山遺跡第1地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

田子山遺跡は、南東流する新河岸川を眼下に臨む右岸台地上にあり、標高約15m、低地との比高差約10mを測る。遺跡の周辺は、市域でも古くから開けてきた地区であるため、大部分が宅地化されており、ごく僅かに畑地を残すのみである。しかし、住宅の多くは木造建築であり、地下への影響がほとんどないと考えられるため、今後、住宅の改築などの再開発に際しては、十分に注意を払わなければならない地区である。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和63年5月16日から開始した。台地縁辺に直交するように3本のトレンチを設定し、バックホーにより表土を削いで確認作業を行ったが、中央のトレンチに住居跡状の落ち込みが発見されたため、その部分を拡張して表土を削いだ。

遺構の調査は翌17日から行ったが、出土する遺物から弥生時代後期の住居跡であることが判明した。18日には写真撮影、実測を終了、20日にはバックホーにより埋め戻しを行い、調査を完了した。

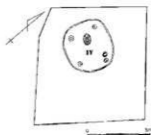


第35図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1号住居跡 (第37図)

〔住居構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 4.1×3.85m。(長軸方位) N-70°-W。(壁高) 15~35cmを測り、急斜に立ち上がる。(床面) 全体に軟弱で、硬化部分はブロック状に残るのみである。(炉跡) 住居中央から西に偏って位置する。90×60cmの楕円形を呈する地床炉で、15cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナー部に配された4本が主柱穴である。北東コーナー部の壁に近い1本は後世のものである。(覆土) 2層に分けられ、上層はローム粒子を



第36図 遺構分布図(1/300)

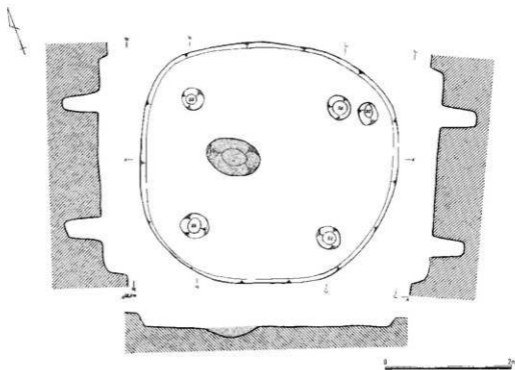
僅かに含み、炭化材・炭化物粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土で、自然堆積状態を呈する。

〔遺物〕 床面上・覆土中から出土したが、すべて破片で非常に少ない。

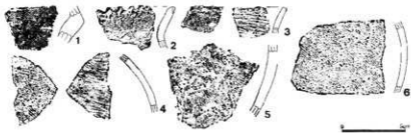
〔時期〕 弥生時代末葉~古墳時代初頭。

1号住居跡出土遺物 (第38図)

1は鉢形土器か。口頸部破片と思われ、頸部は「く」字状に内屈する。口縁部には単節R.L.の斜縄文が施される。外面頸部以下及び内面は赤彩される。



第37図 1号住居跡 (1/60)



第38図 1号住居跡出土遺物 (1/3)

2～6は瓠形土器。2・3は口縁部破片で、口唇部の刻みは2が先端が鋭いへら状工具、3は木口部分の押捺による。4～6は胴部破片。2～6はいずれもハケ目痕を残す。

第4章 西原大塚遺跡跡第9地点の調査

第1節 遺跡の概要

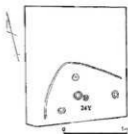
(1) 立地と環境

第2章 西原大塚遺跡跡第8地点(5ページ)を参照。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和63年8月18日から開始した。バックホーを使用し、表土を剥ぎながら遺構確認作業を行った結果、調査区南隅に方形の落ち込みを確認した。20日からは遺構の精査を開始、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての住居跡であることが判明した。

8月26日には遺構の写真撮影・実測を終了、9月10日には埋め戻しを完了、調査を終了した。



第39図 遺構分布図(1/300)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

24号住居跡(第40図)

〔住居構造〕住居南半部分は調査区外にある。(平面形)隅丸長方形か。(規模)不明。(壁高)比較的に遺存の良い所で28cmを測る。(床面)壁際を除いてよく踏み固められている。(炉)住居中央付近に地床炉が2ヵ所確認された。北西壁寄りの炉は66×60cmの楕円形で、焼土は厚さ5cm程堆積している。東側のものはやや規模が小さく、44×42cmの円形で、焼土の厚さは3cm程である。(柱穴)主柱穴4本であると思われるが、そのうちの3本が検出された。(覆土)上層は黒色土、下層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土。

〔遺物〕床面上・覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

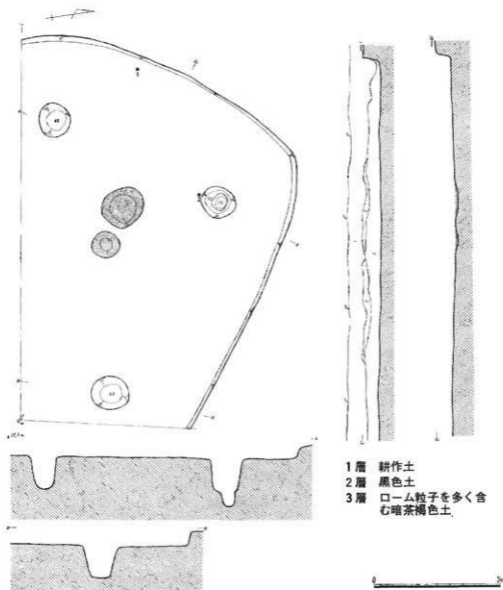
24号住居跡出土遺物(第41・42図)

壺形土器(1・3～5)

1は小型の短頸壺か。胴部は球状を呈し、中位に最大径を測る。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨きが施されるが、顕著にハケ目痕を残す。北西壁寄りの床面上の出土で、遺存度は3/4程。

3は口縁部破片で、口唇上には浅い凹線が巡り、内外面ハケ目調整が施される。赤彩は内外面ともに施されるが、器面は大部分剥落している。

4は高坏形土器の坏・脚部との接合部と思われたが、脚台部の開き方が大きくなりすぎるため、壺形土器の頸部付近と考えられる。頸部には断面三角形の凸帯がまわり、内外面ヘラ磨き後、赤彩される。



第40図 24号住居跡 (1/60)

5は底部。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施され、底面には木葉痕を残す。

高杯形土器(2)

脚台部で、直線的な「ハ」字状を呈し、途中3孔がうがられる。内外面ともにハケ目調整が施される。北コーナーの柱穴付近床面上の出土で、脚台部の4/5を遺存する。

甕形土器(6~11)

6は口縁部小破片で、口唇部外面には押捺が加えられる。内外面横ナデ。

7は頸部から胸部上半にかけての破片で、内外面ハケ目調整が施される。ハケ目の方向は内面が横方向、外面は頸部付近が縦方向、以下斜方向。

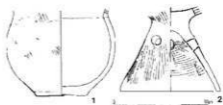
8~10は胸部下半、11は脚台部との接合部である。

8は内面ヘラナデ、外面は縦方向のハケ目調整が施される。

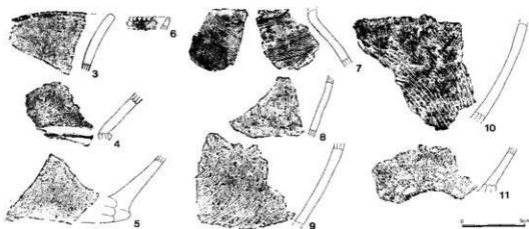
9は内外面ハケ目調整。ハケ目は内面が横方向、外面は縦方向の後、細長く斜方向に施される。

10は外面に粗いハケ目調整が施される。

11は脚台部の欠損により接合面が観察できる。内面はヘラナデされるが、ハケ目痕が僅かに残る。外面は縦方向にハケ目調整が施される。



第41図 24号住居跡出土遺物1 (1/4)



第42図 24号住居跡出土遺物2 (1/3)

第5章 西原大塚遺跡第10地点の調査

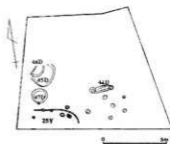
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

第2章 西原大塚遺跡第8地点(5ページ)を参照。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和63年8月27日から開始した。本地点は北側に低地を見下す台地の傾斜部分にあたる。調査区北側は道路に面しており、調査区内の北半部の地下には既設倉庫が存在する。また、通用口が狭いためには重機の導入は不可能であるので、調査区南半部分を中心に人力で表土剥ぎを行った。同時に遺構確認作業を行った結果、深さ20cm程で住居跡の床面と思われる硬化面が検出された。そのため、29日からは遺構の精査を開始、弥生時代末葉から古墳時代初期にかけての住居跡であることが判明した。さらに、



第43図 遺構分布図(1/300)

下層には縄文時代中期の遺物包含層が比較的良好に遺存しており、土坑も4基確認された。

9月13日には精査・写真撮影・実測を終了し、10月4日には人力により埋め戻しを完了、調査を終了した。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土坑

44号土坑(第44図)

〔構造〕両端のピットは後世のものである。(平面形)長楕円形か。(規模)不明×50cm。(深さ)10~15cm。(長軸方位)E-W。坑底は平坦であるが、東から西にかけて傾斜をもつ。北壁は35度、南壁は60度前後で立ち上がる。(覆土)黒色土の単一土層である。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。すべて破片である。

〔時期〕中期後半。

44号土坑出土遺物(第45図1~8)

1は平行沈線間に二列の刺突文列が施される。2は沈線と刺突文からなる土器。刺突は竹管状施工の外側を器面に向け、斜めに行っている。3は断面三角形の隆帯を蛇行させて貼付する。胎土中には、雲母を僅かに含む。4は剥離しているが、隆帯が垂下した土器。僅かに単節の縄文がみられる。5は条線の施された土器。6は無文の土器で口唇端部には刻みがつけられる。胎土中には、雲母が多量に含まれる。7・8は縄文の施された土器。7はRL、8はLRの単節縄文で、8には

沈線がみられる。

45号土坑 (第44図)

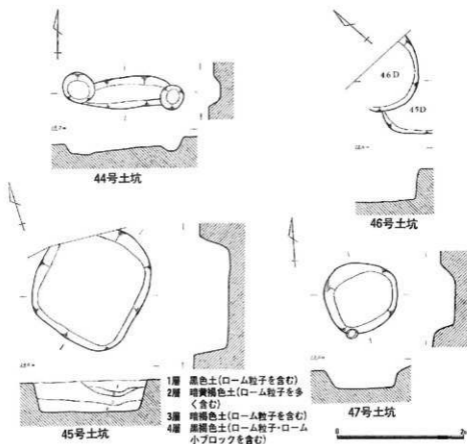
〔構造〕46号土坑を切る。北コーナー部は破壊されている。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 195 × 175 cm。(深さ) 50cm。(長軸方位) N-46°-E。坑底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。(覆土) 上層は暗褐色土、下層は黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕すべて土器片であるが、覆土中から比較的多く出土した。

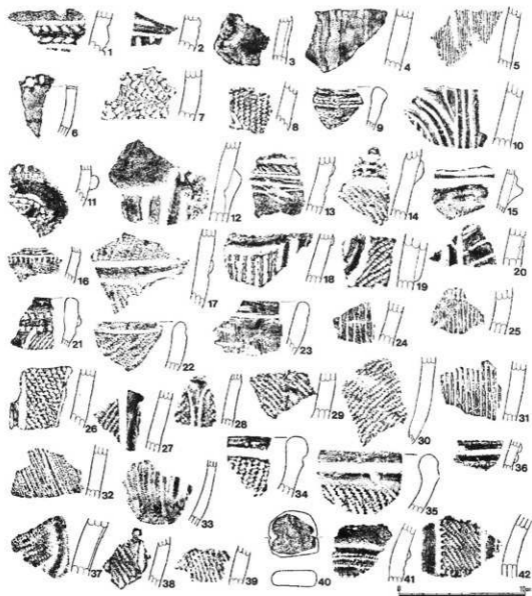
〔時期〕中期後半。

45号土坑出土遺物 (第45図9~33)

9は口唇部下に2条の結節沈線が巡る。胎土中には僅かに雲母を含む。10は垂下する隆帯、曲線的な隆帯と沈線による文様が見られる。11は隆帯による楕円形区画文に沿って角押文的な連続刺突文が施文される。12は上半は肥厚する無文帯となり、下半は垂下する隆帯と沈線により器面が飾られる。13は刻みが増えられた隆帯が巡り、それに沿って平行沈線が施される。14は2列の刺突文が増えられた隆帯が巡り、以下は単節RLの斜縄文となる。15は隆帯が巡り、以下摺糸文が施されて



第44図 土坑 (1/60)



第45図 土坑出土遺物 (1/3)

いるようだ。16は沈線が回り、連続爪形文が施される。17は隆帯を挟んで単節の斜縄文が条方向を変えて施文される。18は2本1組の隆帯が垂下し、Lの燃糸文が施される。19は隆帯と単節斜縄文からなる土器。20は隆帯が垂下し、斜位の平行する沈線が施される。21は口唇部下に無文部をもつ。隆帯の上下には、棒状施文具による刺突文が施され、胴部はおそらく沈線による「∩」字状の区画内に単節斜縄文が施される。22・23は口唇部下に沈線が回り、以下22は単節LRの斜縄文が、23は条線が施される。24・25は燃糸文が施された土器で、24はL、25はRである。26・27は沈線による懸垂文がみられ、26はRLRの複節斜縄文、27はLRの単節斜縄文が施される。28は「∩」字状の区画内が単節の斜縄文となる。29・30は単節斜縄文、31・32は条線が施された土器。33は底部付近

の破片。平行する隆帯による懸垂文と垂下する沈線がみられる。

46号土坑 (第44図)

〔構造〕45号土坑に切られる。北半は破壊されている。(平面形) 円形か。(規模) 不明。(深さ) 1m前後を測る。(長軸方位) 不明。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(覆土) 上層はローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。すべて土器片である。

〔時期〕中期後半。

46号土坑出土遺物 (第45図34~40)

34・35は口唇部下に凹線が巡り、34はLR、35はRLの単節縄文が施される。36は2条の隆帯が巡り、以下は燃糸文が施されているようである。37は曲線的な隆帯が貼付され、RLの単節斜縄文が施される。38は2本の沈線の懸垂文間にRの無節斜縄文が施される。39はRLの単節斜縄文が施される。40は土錘で、両端に刻みがつけられている。重量は23.9g

47号土坑 (第44図)

〔構造〕壁際のピットは後世のものである。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 120×110cm。(深さ) 30cm前後を測る。(長軸方位) N-71°-E。坑底は平坦で、壁は60度前後で立ち上がる。(覆土) ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。すべて土器片である。

〔時期〕勝坂式期か。

47号土坑出土遺物 (第45図41・42)

41は隆帯下に、縦割りの竹管の先端を外側から内側に斜めに切った施文具を押し引きしたと思われる「Σ」字状の連続刺突文が2条巡る。42は縦長の区画内にRLの単節斜縄文が施され、区画に沿って爪形文が連続して押捺される。

(2) 包含層出土の遺物

調査地点は斜面にあっていたが、比較的良好に縄文時代の遺物包含層が遺存していた。出土した遺物は大部分が土器片で、縄文時代中期のものであった(第46・47図)。

1類 前期前葉の土器 (第46図1)

貝殻背圧痕文が施された土器。胎土中には繊維が含まれる。

2類 中期前葉の土器 (第46図2・3)

2は平行沈線により区画され、斜格子目状の平行集合沈線文で埋められる。3は結節縄文が施される。

3類 中期中葉の土器 (第46図4~26)

4~8・10~12・14~16は阿玉台式系の土器。大部分の土器の胎土中には雲母片が含まれる。

4・5は断面三角形の隆帯の両側にヘラ状施工具の押し引きによる連続刺突文が施される。5には波状の平行沈線文がみられる。

6は断面半円形の隆帯が垂下し、その両側には連続爪形文が加えられ、波状沈線文などが横位に施される。

7・11は断面三角形の隆帯と波状沈線文からなる土器。7には隆帯に沿って結節沈線文が施されている。

8・12は2条の連続刺突文列で文様が描かれる。

10はキャタピラ文と波状沈線文が施された土器。

14は「く」字状に屈曲する土器。半截竹管の押し引きによる平行有節線文により区画文が形成される。

15は波状口縁の土器で、波頂部の左側、口縁端部には押捺が加えられる。

16はヒダ状に指頭圧痕が残される。

17は勝版式成立前後の土器。11唇部を上下から交互押捺することにより波状に作り出し、その上下には連続爪形文が巡る。それ以下は斜位の角押文列となる。

9・13・18～26は勝版式系の土器。

9・13はベン先状竹管文を鋸歯状に連続刺突する。

18・19は縦位区画の文様帯が形成された土器。18は連続爪形文を付加した隆帯と半截竹管による隆帯化した平行沈線を縦位に施し、斜位の集合沈線が充填される。19は平行沈線で縦位区画し、それに沿ってヘラ状施工具の刺突文列と連結した半截竹管の押捺が加えられる。

20は楕円形の区画内に波状文が充填されるが、これは半截竹管の外側を器面に向け交互押捺した結果によるものである。

21は強く内湾する土器。ヘラ状施工具による刺突で加飾された隆帯が貼付され、拓影図では不鮮明だが、隆帯間には半截竹管やヘラ状施工具の刺突が加えられている。

22は刻みがつけられた隆帯と無加飾の隆帯が平行に垂下し、平行沈線と連続刺突文が交互に多段に施される。

23・25は隆帯に沿って連続爪形文が施される。

24は刻みが付加された隆帯が貼付され、幅広いキャタピラ文が施される。キャタピラ文間には三文、ベン先状竹管文を鋸歯状に連続刺突した棒状文がみられる。

26は刻みが加えられた隆帯を貼付して区画し、その中に沈線による文様が描かれる。

4類 中期後葉の土器（第46図27～35、第47図36～64）

27～33は加善利EⅠ式系の土器である。

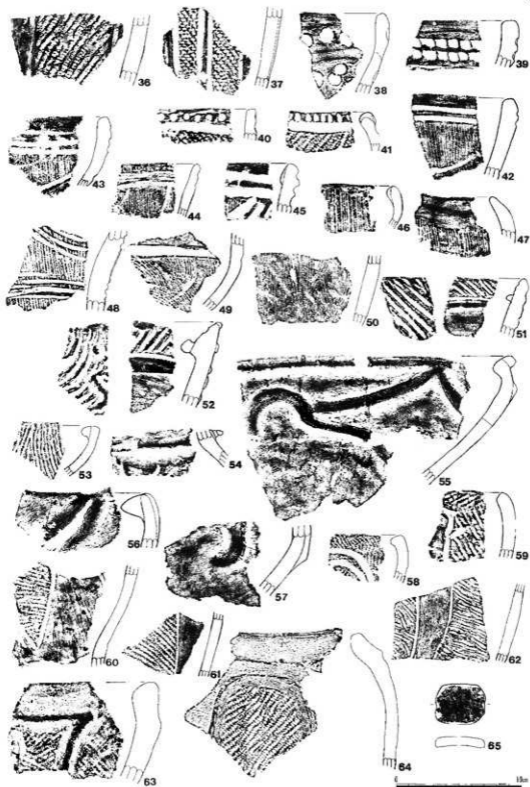
27・28はキャリバー形土器の口縁部破片。27は頸部に無文帯をもち、口縁部文様帯は単節LRの斜縄文を地文とし、連結渦巻文が施される。28はRの燃糸文を地文とし、隆帯が貼付される。

29は渦巻文と区画文がみられ、区画内には縦位の沈線文列が充填される。

30は2本の隆帯により頸部と胴部を区画する。頸部は無文帯となり、胴部はRの燃糸文を地文とし平行する隆帯が垂下する。



第46图 包含层出土遗物 1 (1/3)



第47图 包含层出土遺物2 (1/3)

31はLの燃糸文を地文とし、蛇行・直行する隆帯が垂下する。

32は頸部直下の破片と思われる。隆帯と2条の沈線により胴部と区画する。胴部はLの燃糸文を地文とし、沈線を弧状に施す。

33はLの燃糸文が施される。

34～37は加曾利EⅡ式系のキャリパー形を呈すると思われる土器。

34は渦巻文と楕円形の区画文により口縁部文様帯が形成され、区画内には不明瞭であるが縄文が施されるようだ。胴部には3条の沈線が垂下する。

35は小波状を呈する口縁部破片。波頂部には渦巻文がつけられ、隆帯が垂下する。渦巻文からは隆帯が弧状に貼付され、おそらく半楕円形の区画が形成されよう。胴部の地文は単節RLの縄の縦位回転施文。

36・37は胴部破片。36はLRの単節斜縄文を地文とし、沈線を垂下させその間を磨消す。37はおそらく複節LRの縄を縦位回転させて地文とし、平行沈線を垂下する。

38～41は口縁部に刺突文が巡らされた土器。40・41は刺突文下に凹線が巡り、単節斜縄文が施される。

42～45・48は連弧文系の土器。いずれも地文は条線。

46・47・49・50は条線が施された土器。49は条線が蛇行する。

51～53は曾利式系の土器。いずれも重弧文が施されるものと思われる。51・52は口縁部内面に隆帯が貼付され、斜位の沈線文列が巡る。52は重弧文上に蛇行する隆帯が垂下する。

54は有孔鏝付土器。

55～57は浅鉢形土器。隆帯の貼付により文様が描かれる。

58～64は加曾利EⅢ・Ⅳ式系の上器である。

58～62は沈線によって文様が施された土器。58・59は単節斜縄文を地文とするが、縄文は口縁部と胴部は方向を変えて施文し羽状となる。沈線はおそらく「冂」字状になろう。60～62は磨消縄文の上器。60・61は単節RL、62は無節Rの斜縄文が施されている。

63・64は微隆起線で文様が描かれる土器。いずれも単節の斜縄文が施されるが、63は方向を変えて施文される。

5類 土製品 (第47図65)

胎土中に雲母片を含む無文の上器片を利用した土鍾。周縁はていねいに成形され、両端に刻みがつけられている。重量は13.4g。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

25号住居跡 (第48図)

〔住居構造〕表土剥ぎの段階で、床の硬化面が確認された。しかし、本遺構の掘り込みは縄文時代の包含層中にあり、さらに大部分が調査区外にあると考えられるため、詳細は不明である。(壁高)12cm程である。(柱穴)北東コーナー付近に1本確認されたが、後世のものである。(覆土)黒褐

色上を基調とする。

〔遺物〕床面上・覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

25号住居跡出土遺物（第48図）

壺形土器（1～3）

1は複合口縁を呈する口縁部破片で、複合部には無節L、17唇上には無節Rの斜縄文が施される。内面及び外面頸部はヘラ磨き後、赤彩される。

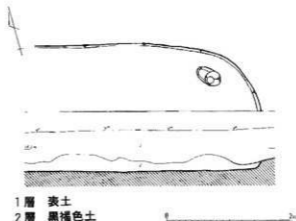
2・3は肩部付近の破片で、2は2条の「S」字状結節文下にRLの単節斜縄文がみられる。3は無節Lの斜縄文を施した後、下方に小波状のヘラ描沈線文を描いている。

甕形土器（4）

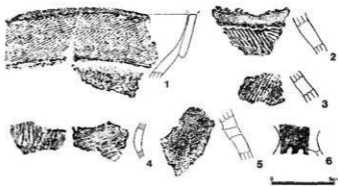
頸部付近の小破片で、内外面ともにハケ目調整が施される。

高杯形土器（5・6）

5・6ともに脚台部の破片で、5は途中1孔がうがたれており、外面赤彩される。6は孔が横に2コずつの3ヶ所うがたれている。外面はよく磨かれているが、僅かにハケ目痕を残す。



第48図 25号住居跡 (1/60)



第49図 25号住居跡出土遺物 (1/3)

第6章 中野遺跡第9地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

志木市の南半部にひろがる台地は、標高20～9m前後を測り、ゆるやかに北側に向かって標高は下がっている。この台地はかつて、古多摩川が形成した扇状地であり、一般に武蔵野台地として知られている。志木市の遺跡は、主にこの台地上に集中して分布しており、中野遺跡もその中の1つである。

中野遺跡は、柳瀬川の形成した沖積地に向かって細長く開析された2本の小支谷によって挟まれた舌状台地上に位置する。遺跡の標高は9～11mで、低地との比高差は約3mを測る。遺跡の現況は宅地化が急速に進んできており、畑地は減少しつつある。

本遺跡では過去の発掘調査により、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の住居跡が検出されている(佐々木・尾形 1985・1989)。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和63年10月15日から開始した。調査区に合わせ、ほぼ南北に2m幅のトレンチを



第50図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

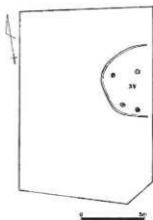
2本設定し、バックホーを使用し、表土を剥ぎながら遺構確認作業を行った結果、調査区東隅に住居跡と思われる落ち込みを確認した。そのため、17日からは遺構の精査を開始、弥生時代末葉から古墳後代初頭にかけての住居跡であることが判明した。

10月19日には遺構の写真撮影・実測を行い、21日には埋め戻し完了、調査を終了した。

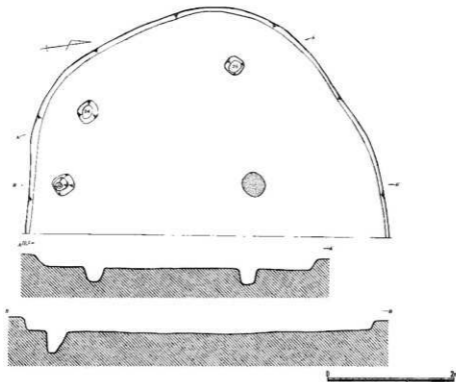
第2節 弥生時代の遺構と遺物

3号住居跡 (第52図)

〔住居構造〕住居東半部分は調査区外にある。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×5.60m。(壁高) 20cm前後を測り、壁の立ち上がりはさほど急ではない。(床面) 全面軟弱で、硬化部分は確認できなかった。(炉) 38×24cmの楕円形の地床炉で、掘り込みはほとんどない。(柱穴) 深さ24cm・26cmの西側の2本が検出された。主柱穴は4本で構成され、それぞれ各コーナー部に配されると思われるが、東側の2本は調査区外にあらうか。なお、南壁寄りにあるピットは入口施設に伴うものと考えられる。(覆土) 2層に分けられ、上層は黒色土、下層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土で、自然堆積状態を呈する。



第51図 遺構分布図 (1/300)



第52図 3号住居跡 (1/60)

〔遺物〕床面上・覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

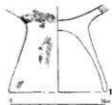
3号住居跡出土遺物(第53・54図)

壺形土器(2~4)

2は複合口縁を呈する口縁部破片で、複合部外面には4本の棒状浮文が付きされる。内外面ともにヘラ磨きが施されるが、複合部直下の頸部外面には僅かにハケ目痕が残る。全面赤彩される。

3は直線的に大きく開く口縁部破片で、口唇上にはRLの単節斜縄文が施される。内外面ともにていねいにヘラ磨きが施されるが、ハケ目痕を残す。口唇部を除き、赤彩される。

4は胴部上半から中位にかけての破片で、胴部上半にはLR・RLの単節斜縄文が4段羽状に施され、下端に2条の「S」字状結節文がまわる。また、最上段のLRの単節斜縄文上には3個の円形赤彩文が付される。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整後、ていねいに縦方向のヘラ磨きが施され、赤彩される。



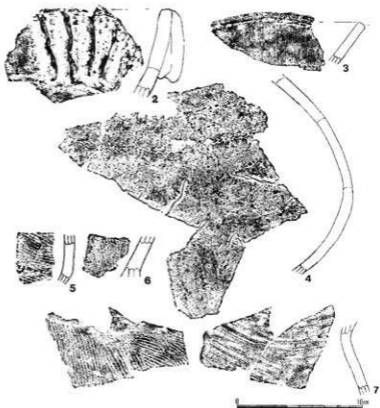
第53図 3号住居跡出土遺物1
(1/4)

甕形土器(1・5~7)

1は台付甕の脚台部で、「ハ」字状を呈する。内面はヘラナデ、外面は磨耗しているが、ハケ目痕がみられる。遺存度は2/3程である。

5・6は胴部下半と思われる。6は台付甕で、脚台部との境付近であろう。いずれも外面にはハケ目調整が施され、内面はヘラナデされる。

7は口縁部から胴部上半にかけての破片。内面は口縁部付近横方向のハケ目調整、以下ヘラナデされる。外面は口縁部付近横ナデ、以下斜方向のハケ目調整が施される。



第54図 3号住居跡出土遺物2 (1/3)

〔引用・参考文献〕

- 伊藤楨樹 1973 「伊勢湾周辺の弥生時代の審制」 『信濃』 第25巻第1号
- 岡田成夫・松本 完他 1981 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 (No. 6 遺跡-I)』
横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団。
- 1983 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 (No. 6 遺跡-III
No. 9 遺跡-II)』 横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
- 1984 『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 (No. 6 遺跡-IV)』
横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
- 柿沼幹夫・駒宮史郎他 1985 『神川村前組羽根倉遺跡の研究』 『紀要』 12 埼玉県立博物館
- 小宮恒雄他 1975 『藏勝土遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1985 『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』 志木市
遺跡調査会調査報告第1集
- 1987 『新郷遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』 志木市
遺跡調査会調査報告第3集
- 1989 『志木市遺跡群Ⅰ』 志木市の文化財第13集
- 志木市史編さん室 1984 『志木市史 原始・古代資料編』
- 高橋 敦 1987 『針ヶ谷遺跡群』 富士見市遺跡調査会調査報告第27集
- 谷井 彪・宮野和明他 1975 『西原大塚遺跡発掘調査報告』 志木市の文化財第4集
- 玉井 功他 1982 『巨摩・瓜生堂』 財団法人 大阪文化財センター
- 都出比呂志 1987 『墳墓』 「岩波講座 日本考古学」 4 岩波書店
- 西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』 埼玉県埋蔵文化財事業団報告書第62集
- 山岸良二 1981 『方形周溝墓』 ニューサイエンス社

圖 版



調査区遠景

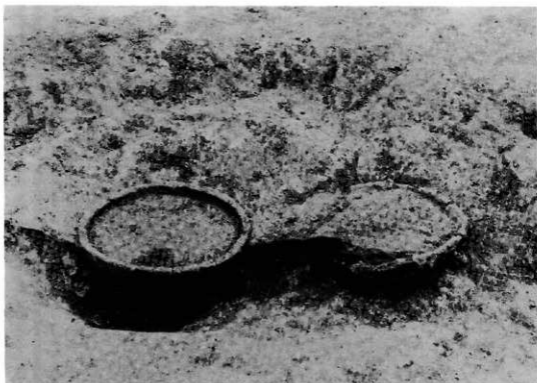


発掘風景

図版二 西原大塚遺跡第八地点



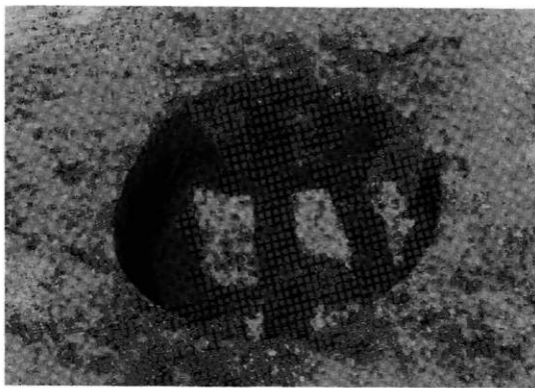
縄文時代11号住居跡



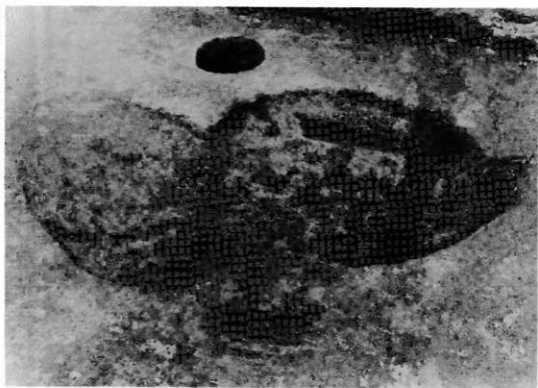
縄文時代11号住居跡伊跡



15・16号土坑



20号土坑



31号(右)・32号土坑



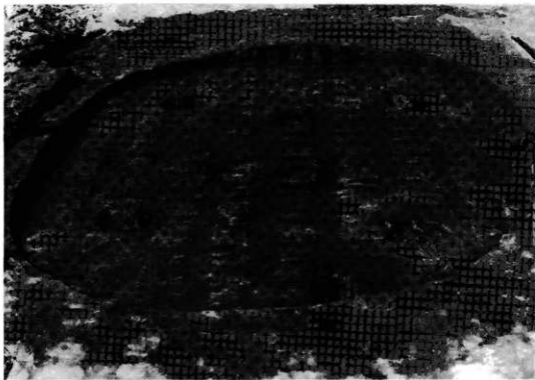
33号土坑



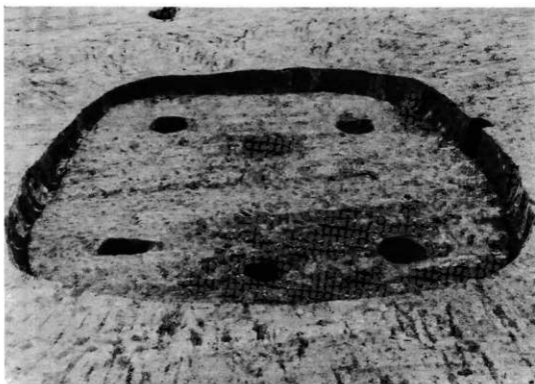
35号土坑



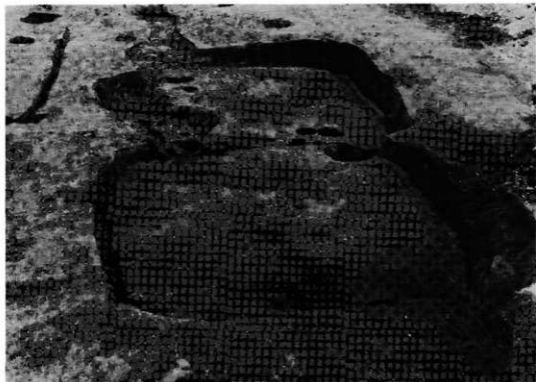
36号土坑



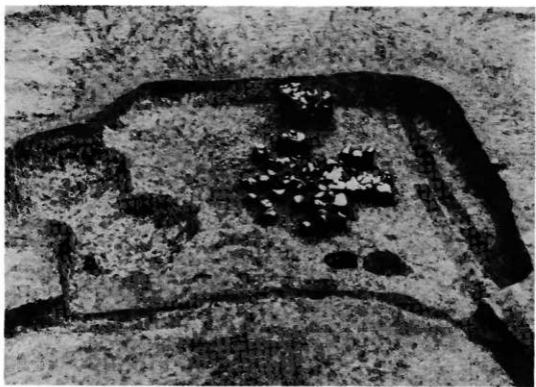
弥生時代11号住居跡



弥生時代14号住居跡



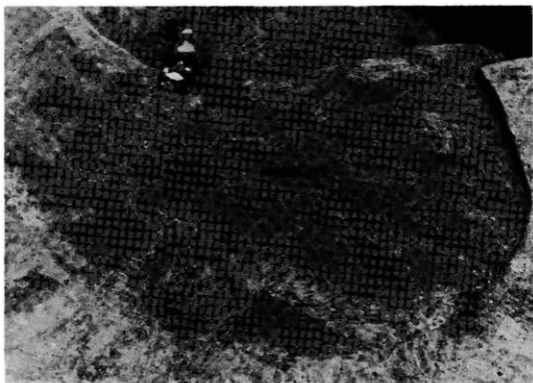
弥生時代17号(下)・18号住居跡



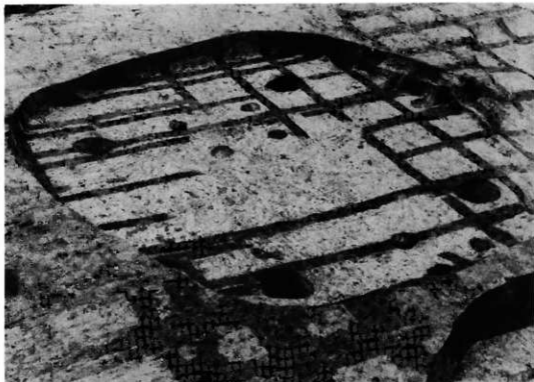
18号住居跡遺物出土状態



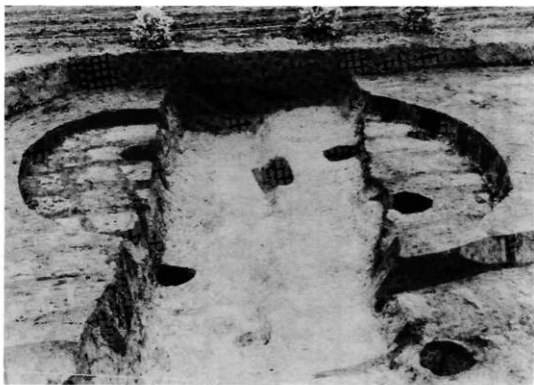
弥生時代19号住居跡



弥生時代20号住居跡



弥生時代21号住居跡(掘り方)

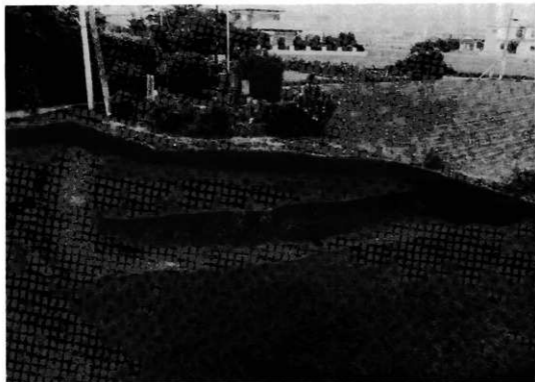


弥生時代22号住居跡

図版一〇 西原大家遺跡第八地点



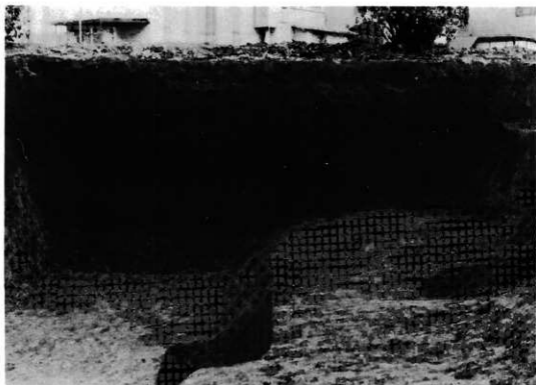
1号方形周溝墓調査風景



1号方形周溝墓(西より)



1号方形周溝墓(北より)



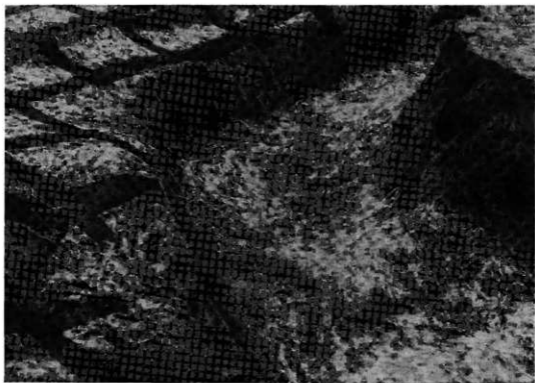
1号方形周溝墓上層地積狀態(西溝)



1号方形周溝墓北溝



1号方形周溝墓西溝



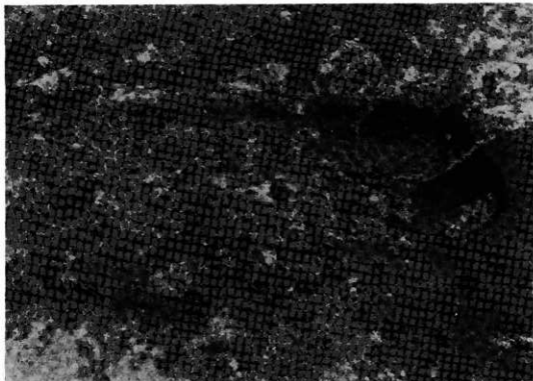
1号方形周溝墓北西隅



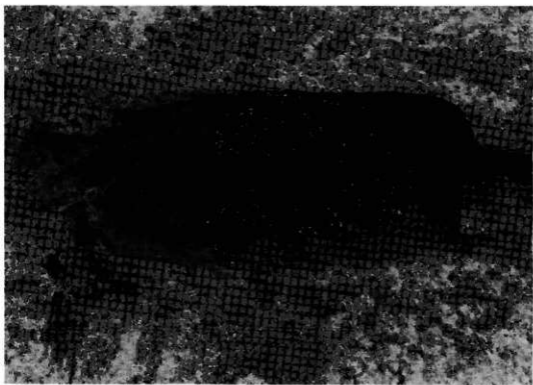
39号(下)・40号上坑



41号上坑



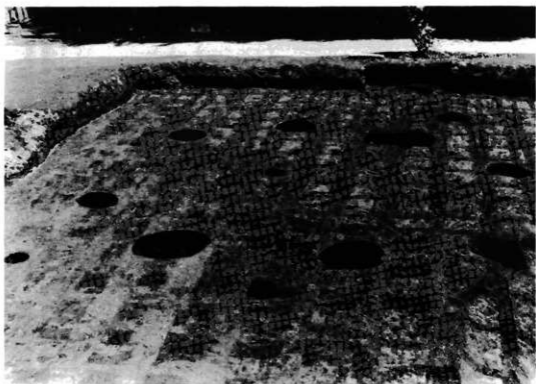
42 号 土 坑



43 号 土 坑



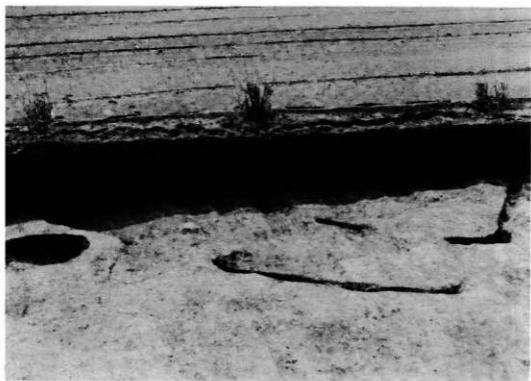
1号方形周溝墓周辺(北より)



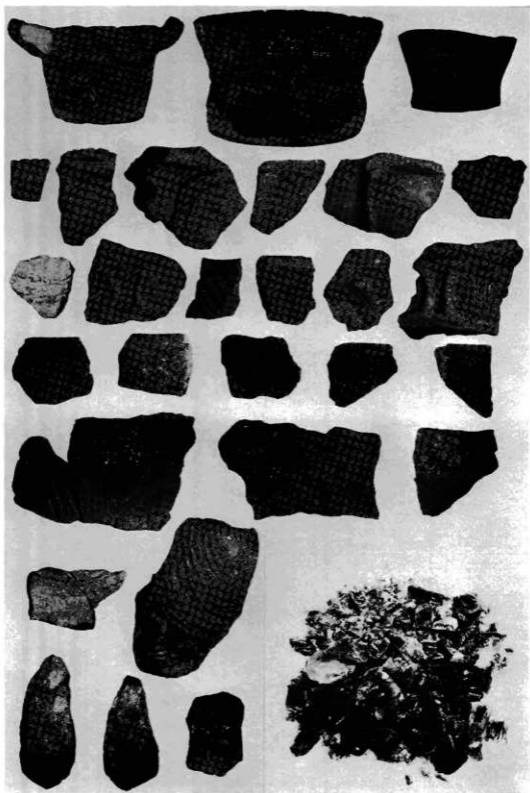
1号掘立柱建築遺構



平安時代1号住居跡



平安時代2号(下)・3号住居跡



縄文時代11号住居跡出土遺物



14号住居跡出土遺物



15号住居跡出土遺物



18号住居跡出土遺物



21号住居跡出土遺物



22号住居跡
出土遺物



11号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物



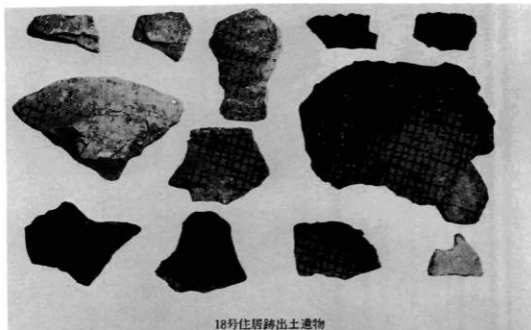
14号住居跡出土遺物



15号住居跡出土遺物



17号住居跡出土遺物



18号住居跡出土遺物



19号住居跡出土遺物

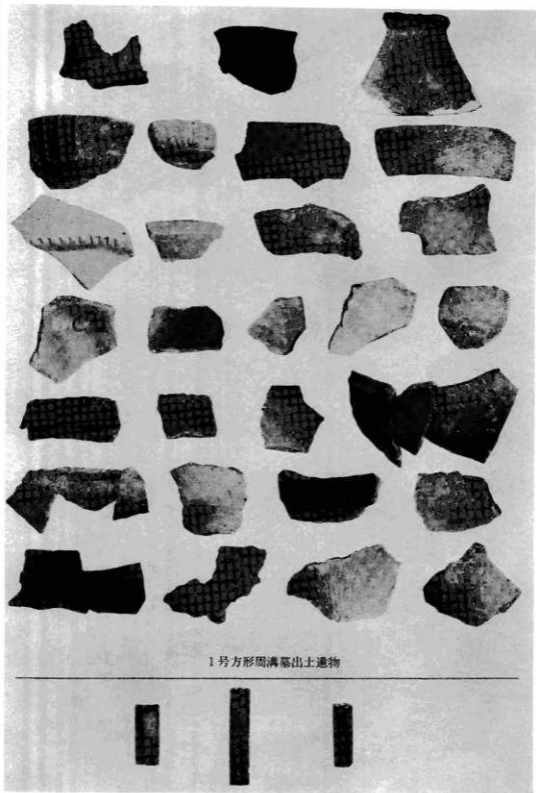


21号住居跡出土遺物



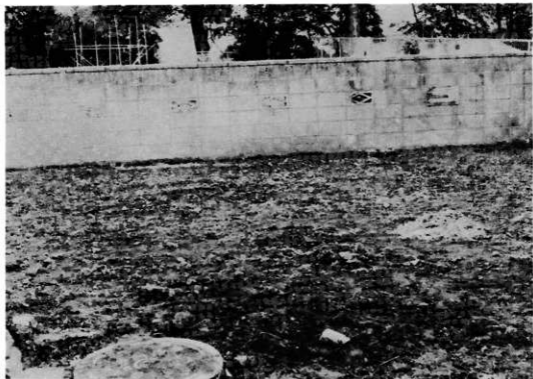
22号住居跡出土遺物

弥生時代住居出土遺物(18・19・21・22号住居跡)



1号方形周溝墓出土遺物

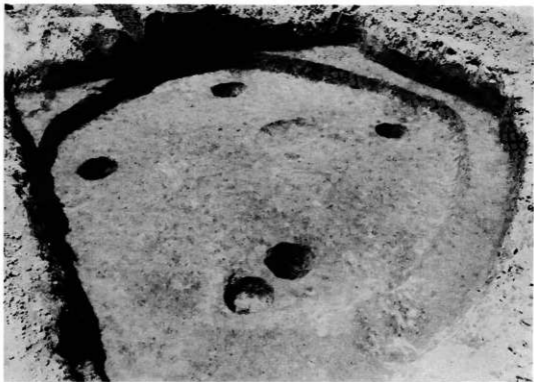
41号土坑出土遺物



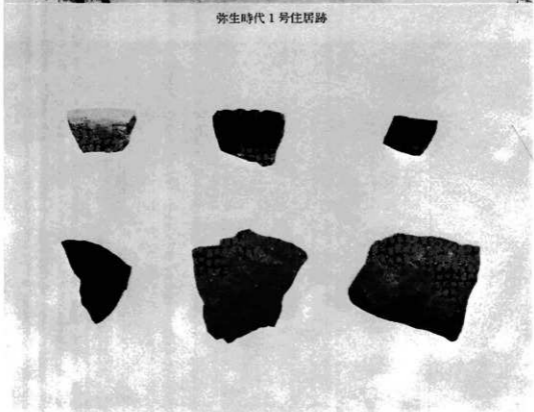
調査区近景



発掘風景



弥生時代1号住居跡



弥生時代1号住居跡出土遺物



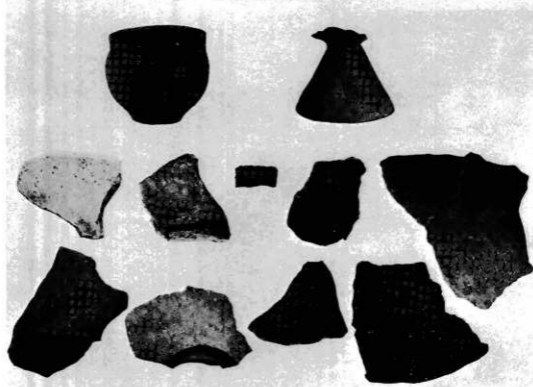
調査区近景



発掘風景



弥生時代24号住居跡



弥生時代24号住居跡出土遺物



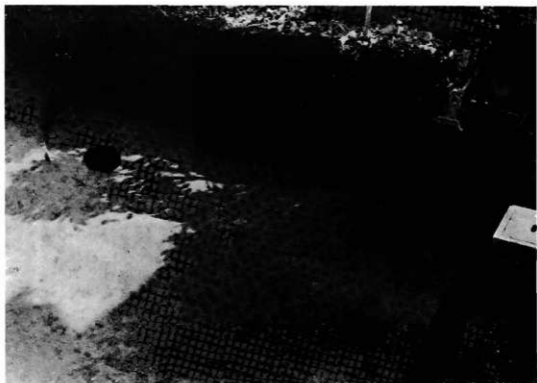
発掘風景



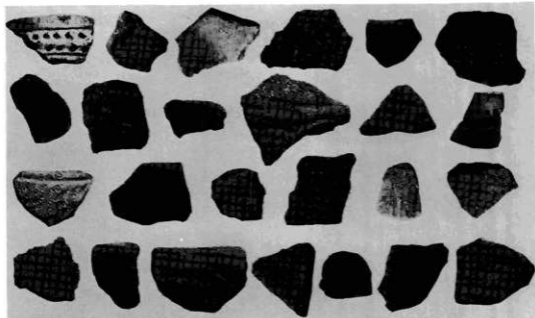
発掘調査区全景



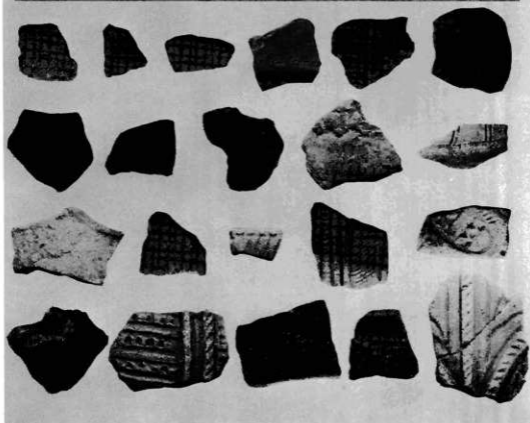
45号(左)・46号土坑



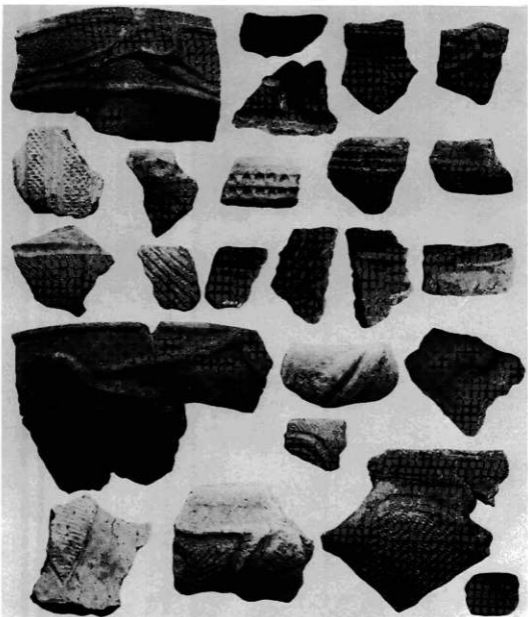
弥生時代25号住居跡



土坑出土遺物



包含層出土遺物



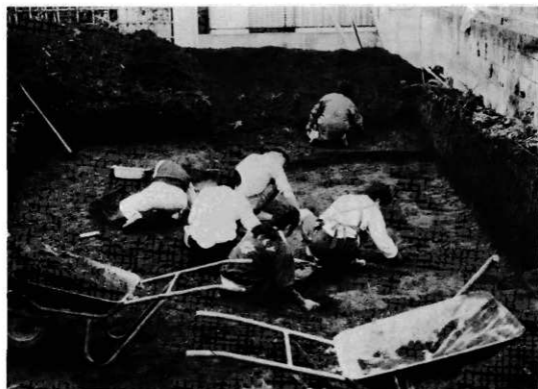
包含層出土遺物



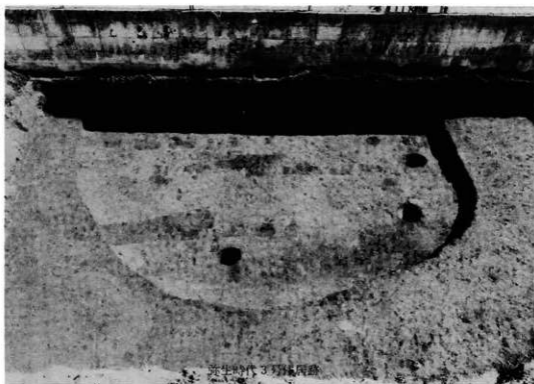
弥生時代25号住居跡出土遺物



調査区近景



発掘風景



弥生時代3号住居跡出土遺物

志木市の文化財 第14集

志木市遺跡群 II

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成2年3月31日

印刷 梅田印刷株式会社

